

### 第3章 吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

#### 1 調査の経過

教養部の敷地は吉田構内のほぼ中央部に位置し、複合棟新営予定地は同敷地の南西部分に計画された。昭和62年度当初には、事前の発掘調査を必要とする案件として複合棟の新営工事計画が埋蔵文化財資料館運営委員会に諮られたが、予算措置が未定であったため調査は先送りとなった。しかし、7月に至って、急遽新営計画が具体化したため同委員会とは対応を協議した。

1) 予定地は遺跡保存地区と弥生時代から鎌倉時代の遺物が多量に出土した図書館増築地域のほぼ中間にあたり、両地域から直線距離でわずか約150mである。こうした周辺地域における過去の調査結果および立地から、同予定地でも埋蔵文化財の存在が十分に予想された。そこで、同委員会ではまず、試掘調査によって遺構、遺物包含層の有無、分布状況を把握し、調査結果を踏まえて再度同委員会において協議し、新営工事計画との調和をはかることとした。この時期、埋蔵文化財資料館は第2章で述べた教育学部教育実践研究指導センター新営予定地での発掘調査中であったが、工事計画日程から早急に試掘調査を行うことになった。

試掘調査は新営予定地内北半部に存在する既設の自転車置場間に、東西に幅約0.6m、長さ約32m（Aトレンチ）、26m（Bトレンチ）の2本の試掘坑を設定し、昭和62年7月21日から27日にかけて実施した。

Aトレンチ東半部は構内造成時の埋め土の下が耕作土で、その直下が地山であるが、後世の削平により遺構、遺物包含層は消失していた。地山は西に向うにつれて下降し、西半部では茶褐色および黒褐色粘質土の遺物包含層3枚に加え溝、柱穴を検出した。吉田構内での過去の調査による土層、埋土の色調から、弥生時代から古墳時代のもと考えられた。

Bトレンチではほぼ全面に遺構埋土な

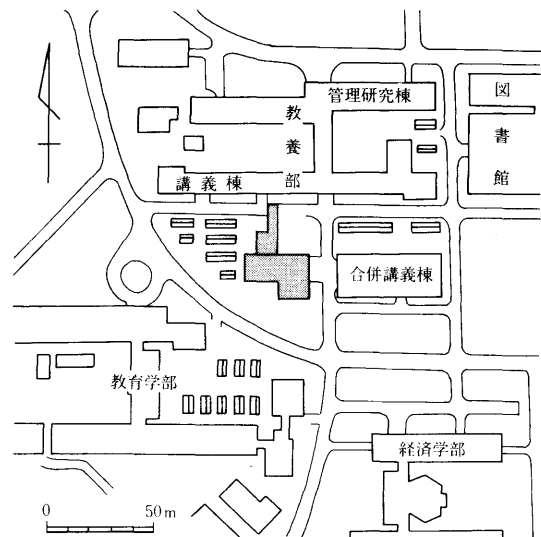


Fig. 16 調査区位置図

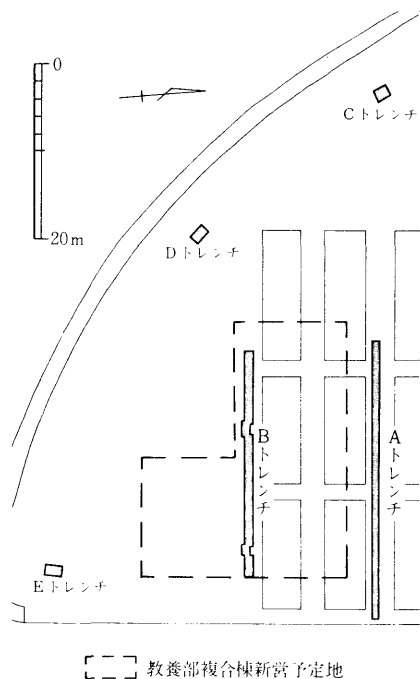


Fig. 17 試掘調査トレンチ設定図

いしは遺物包含層が認められ、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。また、この層を掘り込んで近世の埋甕土壙1基が検出された。既設の自転車置場の基礎部分が同層に達していないことから、新営予定地では後世の削平が著しい北東部を除いてほぼ全面に遺構、遺物包含層が埋存していることが明らかとなった。試掘調査の結果を受けて埋蔵文化財資料館運営委員会は、新営工事の際には予定地内における事前の発掘調査が必要であると、その後の取扱いは調査結果を踏まえて協議することにした。

発掘調査は、自転車置場解体、撤去後の昭和62年9月14日から12月12日にかけて実施した。建物一階部分の面積は約500㎡であるが、教養部棟とをつなぐ共同溝および新営建物の周囲を巡る汚・排水管等の付随工事部分も調査対象となり、調査総面積は約900㎡となった。

なお、12月11日には現地説明会を開催し、調査の成果を公表した。

## 2 層位 (Fig. 18, PL. 8)

現地表面の標高は約19.20~19.30mで、西側がわずかに高いものの、調査区全体ではほぼ平坦に近い。表土(構内造成時の埋め土)の層厚は約30~80cm、平均40~50cmである。表土の下位には基本的に耕作土、床土が認められるが、北・南東両端部では床土を欠く。4層：オリーブ褐色粘質土より下位が非人為的な堆積層であるが、同層は後世の削平により部分的にしか残存しておらず、遺物もほとんど出土していない。4層上面の標高は約18.60mである。5層：黒褐色粘質土は最大20cmの層厚をもち、南半部を中心に堆積する。古墳時代から平安時代および江戸時代の遺物を包含する。6層：オリーブ灰色粘質土は層厚約10cmで弥生時代から江戸時代の遺構の検出面である。同層が木炭を多く含んでいたことから部分的にトレンチを設定して調査したところ、層厚約10~20cmの7層：オリーブ灰色土とともに縄文時代晩期中頃の遺物包含層であることが明らかとなった。両層とも不連続に堆積しており、遺物は南端部に設定したA・Bトレンチを中心に出土した。なお、北・南東両端部では耕作土の直下が6層である。7層の下位は木炭を若干含む層厚約20cmの灰オリ

層 位

吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

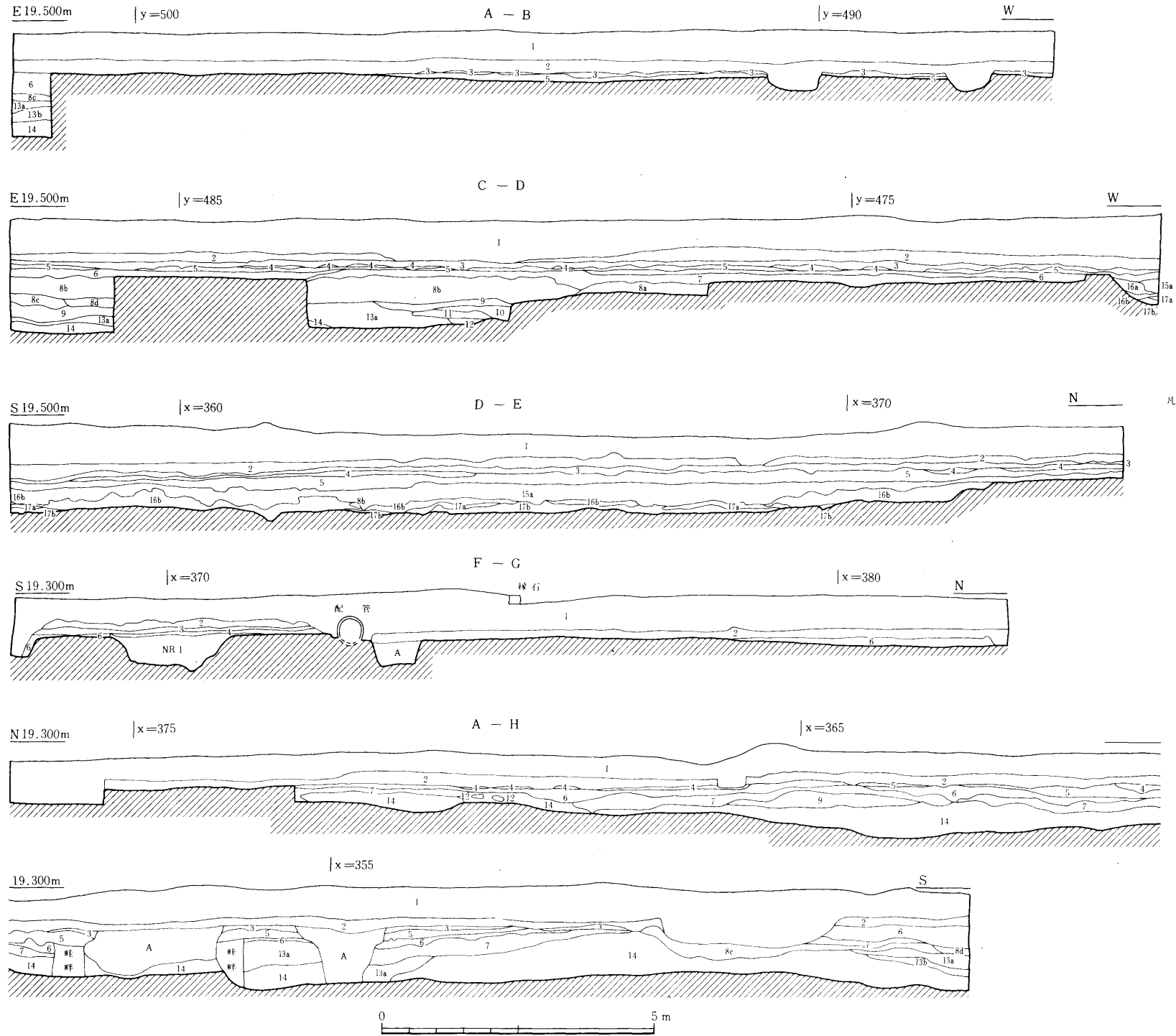


Fig. 18 土層断面図

ブ色粘質土で、縄文土器が若干量出土したが、調査範囲内では時期を決定する資料には恵まれなかった。

C-D壁の $y=479$ 付近の深掘りではその下に落とし穴、河川跡の検出面である層厚約10~20cm暗褐色土が認められた。検出面の標高は約18.30mである。9a~14層は縄文時代の河川跡の埋積土で暗緑灰色ないしは緑灰色を基調とした砂、礫の互層である。15a~17bは第2号河川跡の埋積土で、黒褐色土および黒褐色粘質土、オリブ黒色土の堆積が認められる。

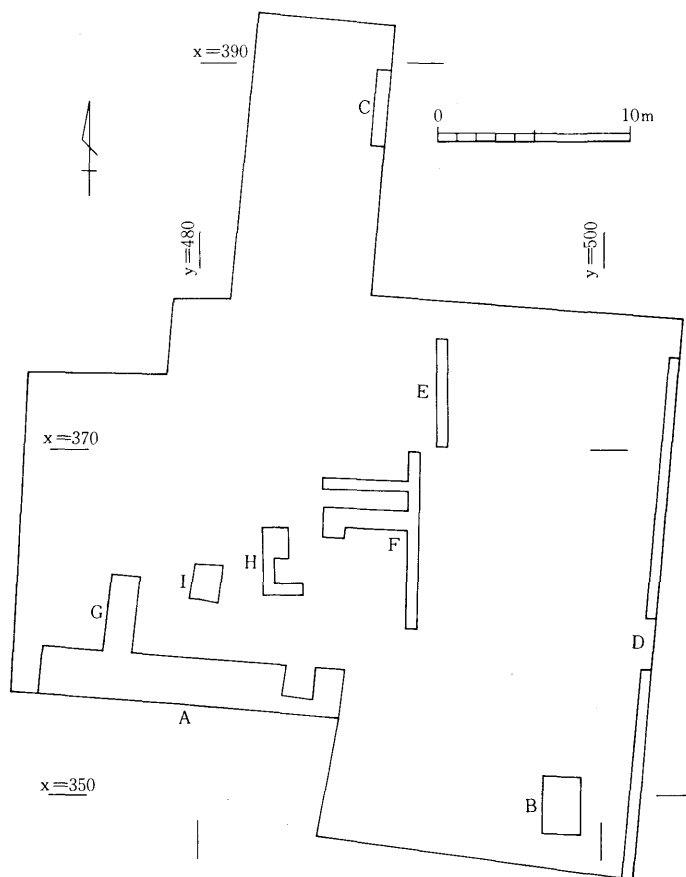


Fig. 19 トレンチ設定図

### 3 遺構・遺物

#### (1) 縄文時代の遺構・遺物

弥生時代以降の遺構検出の際、検出面の6層から縄文土器が出土した。そのため、木炭とともに土器が集中して分布していた調査区南端部にA (2.5×16m)・B (2×3m) 二本のトレンチを設定し、遺物包含層の掘削を行った。6~8層の三枚の包含層を掘削した段階で、Aトレンチから河川跡が検出され、遺構検出の発端となった。また、その規模を調べるため、流路にあたりと考えられた地域に設定した四本のトレンチのうち、Hトレンチから落とし穴が検出された。なお、6層を検出面とするものには溝、浅い谷状の落ち込みがある。

落とし穴 (Fig. 21, PL. 9)

調査区中央部のHトレンチで検出した。当初はAトレンチで認められた河川跡の流路方向を調べるために設定したトレンチであったが、西端部分が検出されたためトレンチを拡

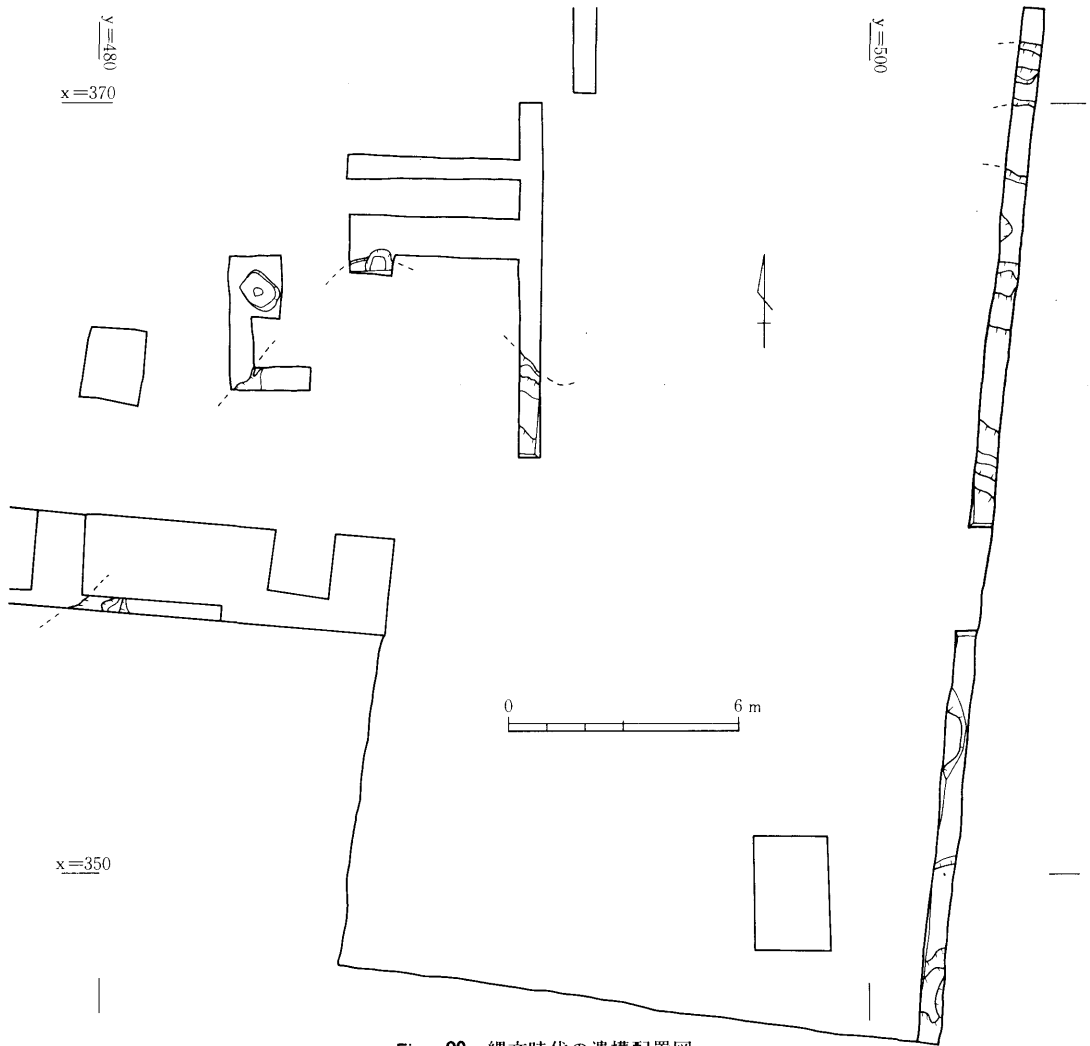


Fig. 20 縄文時代の遺構配置図

張した。平面形態は底面と同じく隅丸長方形で、長軸105cm、短軸78cm、検出面からの深さ25cmの規模をもつ。壁面は外方へ傾斜しながら立ち上がる。底面は中央部に向かってわずかに下降しており、長軸90cm、短軸72cmである。底面中央部には上面25cm×22cm、下面12cm×14cm、深さ58cmの円形のピットが存在する。ピット内には底面から10cm～49cmの範囲内に6個の板石状の自然石が縦位に詰められており、中央部には間隙が認められる。埋土は灰オリーブ色土（Hue10YR 6/2）である。検出面の標高は約18.25m。遺構の性格上、さらに同種の落とし穴が存在する可能性があったため、F・Hトレンチを拡張後、さらにIトレンチを設定して調査したが検出できなかった。

内部からの出土遺物には縄文土器片および剥片1点がある。時期はにわかには決定しがたいが、検出面の直上層が晩期中頃の遺物包含層であること、同一面で同時期の河川跡が検出されていることおよび<sup>14</sup>Cの測定結果から晩期中頃をそれほど遡るものではないであろう。

出土遺物 (Fig. 22, PL. 18・23)

1は粗製の縄文土器で、小破片のため器形はわからない。外面ナデ、内面は荒い条痕を施す。2は剥片で上端部を欠損する。正面は左・右および上方向からの加撃による3枚の剥離面によって構成される。正面左側縁はヒンジフラクチャーをおこしている。

河川跡 (Fig. 20, PL. 7(2))

調査区南西部に設定したAトレンチで、東への落ち込みが確認された。そのため、さらに4本のトレンチを追加し、流路方向を調査した。その結果、調査区東壁に沿って設定したDトレンチのほぼ全面および調査区中央部のF、H両トレンチの南端部で落ち込みが検出された。F、Hトレンチ付近でやや蛇行しており北東から南西に向かって流れる。試掘調査の際、E地区でも検出していることから、幅約29m以上の規模をもつものと考えられ、検出面からの深さは最深部で約80cmである。検出面の標高は約18.20～18.40m。なお、Dトレンチ北端部で同一面で支流と考えられる幅約1.7m、深さ約40cmの河川跡が検出された。出土遺物には縄文土器深鉢、浅鉢および剥片がある。晩期中頃。

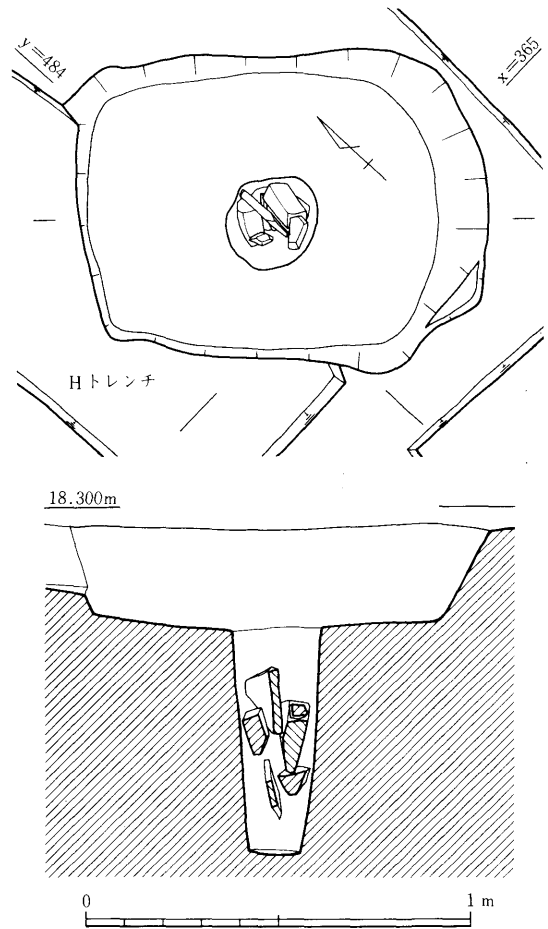


Fig. 21 落とし穴実測図

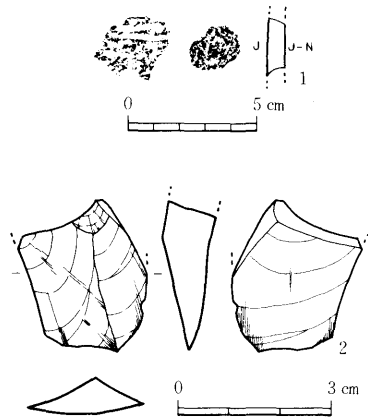


Fig. 22 落とし穴出土遺物実測図

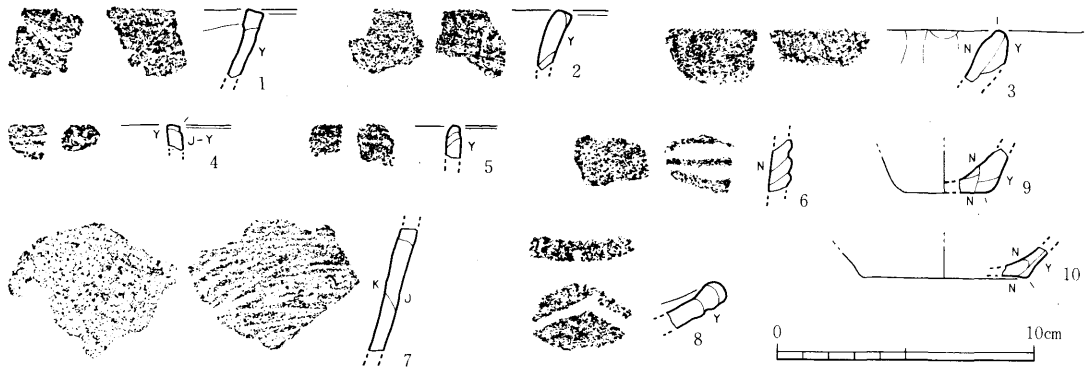


Fig. 23 河川跡出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 23, PL. 18)

いずれも粗製で、風化、磨滅によって器面調整の観察が困難なものが多い。1～7は深鉢ないしは浅鉢。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり内面に段をもつもの(1)、外傾するもの(2・3)、直立するもの(4・5)がある。端部は平坦なもの(1・2・4)と丸いもの(3・5)がある。内外面とも横ナデが多いが、3は内面ナデ、4は外面横条痕のうち横ナデ。6・7は胴部で7は外面横、斜め条痕、内面ヘラケズリを施す。8は波状口縁をなす浅鉢で、肥厚する口縁端部に刻み目、口縁下外面に1条の沈線を施す。端部は丸い。内外面横ナデ。9・10は底部。9は小形品で浅鉢であろう。

### 第3号溝

調査区中央部を北西から南東に走り、第1・3号竪穴住居跡を切っている。谷状の落ち込みに流れ込んでおり、検出した長さは約7mである。幅約40～60cm、検出面からの深さ3～4cmを残す。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には石鏃1点がある。

### 出土遺物 (Fig. 41-12)

凹基無茎式の石鏃で、先端部、脚部の片方を欠損する。挟りは浅く脚端部は平坦に近い。正面基部・左脚部側には槌状の調整加工が施される。

### 谷状遺構 (Fig. 24・29, PL. 6)

調査区中央部から南東および南西に「U」字形に開く浅い谷状の落ち込みで、幅約2.5～5mの規模をもつ。深さは検出面から平均約10～15cmで、谷底へは緩やかに落ち込む。南東へは蛇行しながら北へ大きく開くが、深さは2～3cmと極めて浅い。検出面の標高は約18.55～18.65m。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒褐粘質土を含む砂礫である。

遺物は「U」字形に開く落ち込みの奥部付近に集中して、上層から古墳時代後期、下層か

ら縄文時代晩期の二時期のものが出土した。古墳時代の遺物は上層から若干出土し、量的には後者の方が多い。

出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、石器には比較的多量の剥片がある。縄文時代晩期終末の一時期に谷状の落ち込みが埋積し、埋まりきらなかった窪みに古墳時代の遺物が混入したものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 25, PL. 18・23)

土器 (1~12)

1~9は縄文土器。1~5は突帯文の甕。1・2・4は口縁部が内傾する。1は口縁端部が短く外反し、突帯のやや下位に煤が付着する。刻目の有無は不明。2は刻目をもたない突帯の下位に2個の穿孔を有する。3は外反する口縁部をもち、端部よりやや下位の突帯にやや大きめの刻目をもつ。6~9は底部。6は浅鉢、7~9は甕ないしは深鉢。6~8は平底、9は窪み底。10・11は土師器。10は甕で、頸部内面に稜をもち、口縁部は短く外湾しながら開く。端部は丸い。11は高坏の脚部。12は須恵器の甕。口縁部は直線的に外反し、端部内面に断面三角形の低い貼付突帯をもつ。

石器 (13~26)

13は磨製石斧の頭部。正面はほぼ平坦であるが、裏面は凸レンズ状に湾曲し、断面形はいびつな楕円形を呈する。正面右側面には縦方向の研磨が観察される。正面の3枚の剥離面は荒い成形段階のもの。14は砥石で、正・裏両面を研砥面とする中砥。下面に比べ上面の摩滅が著しい。研砥方向は不明。15~18は石鏃。15は凹基無茎式、16~18

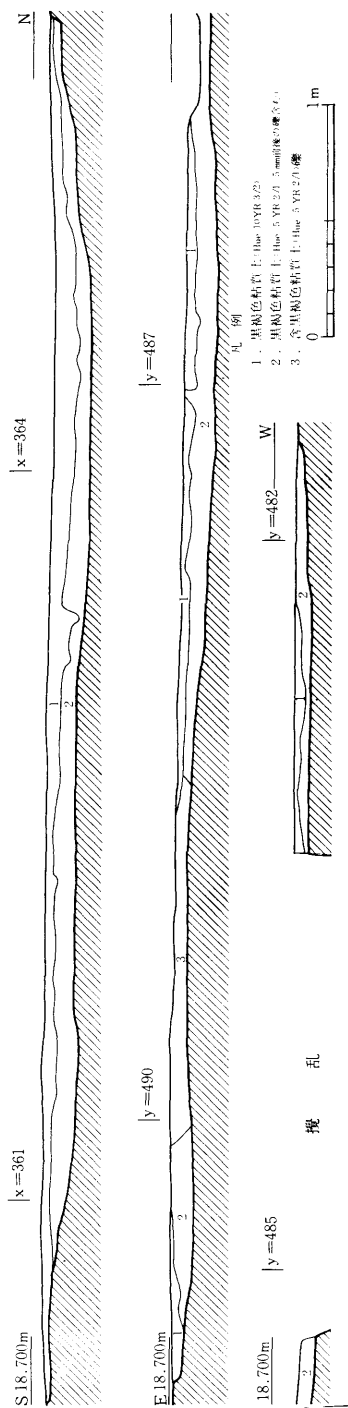


Fig. 24 谷状遺構土層断面図



吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

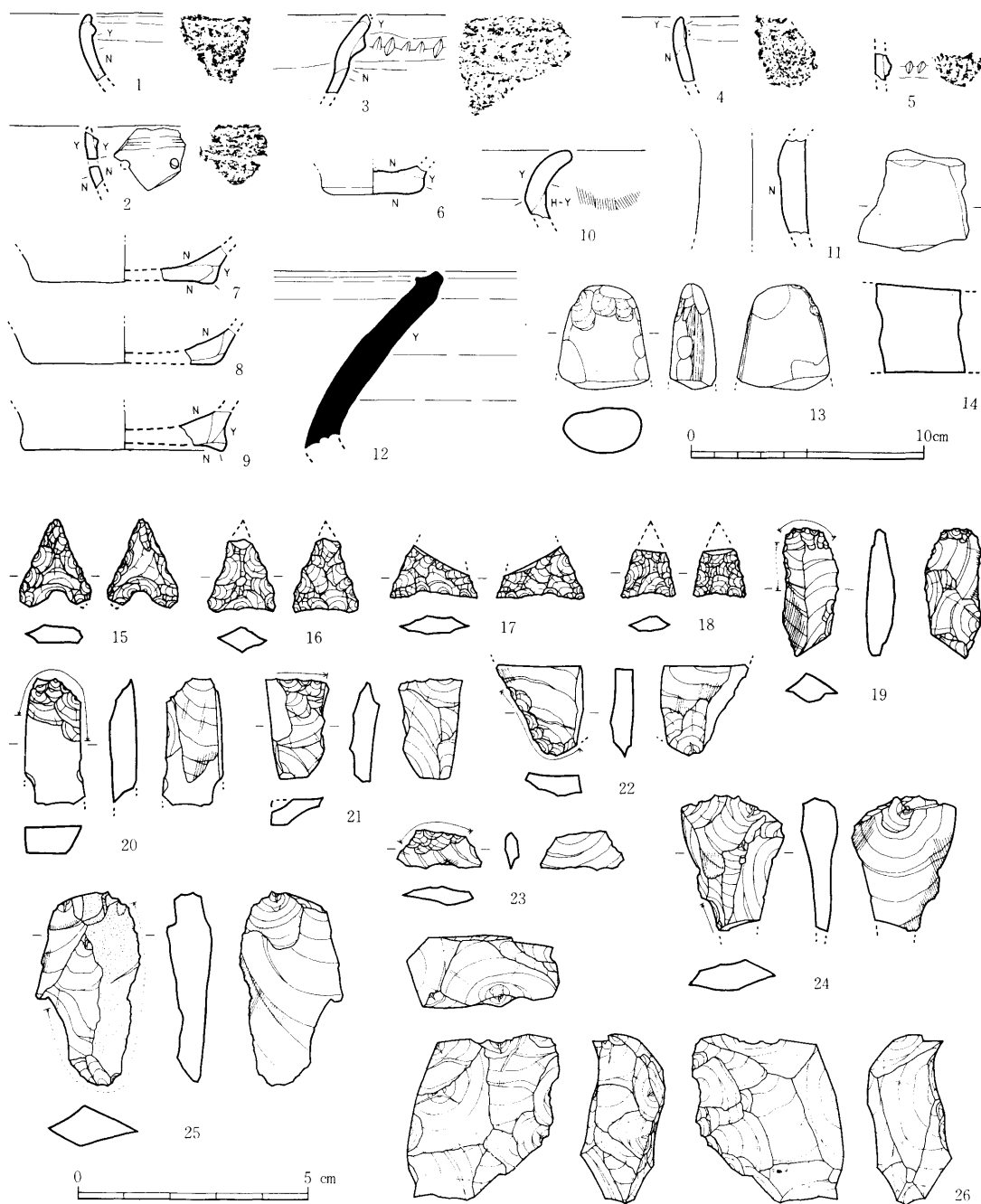


Fig. 25 谷状遺構出土遺物実測図

は平基無茎式。15は剥片鏃で、身部の中央には素材面を残す。脚端部が丸く、挟りは正面が1枚、裏面が2枚の剥離によって作り出される。16は左右対称で、二次加工も荒く、

やや厚手に仕上がっている。17は裾部が鋭く尖る。18は整った二等辺三角形を呈する小形のもので、基部はわずかに内湾する。19～24は加工痕のある剥片。19は正裏両面の縁に二次加工が施され、スクレイパーとしての機能をもつものであろう。断面形は菱形を呈する。正面左側縁には使用痕と思われる微細な剥落痕が認められる。20・21は縦長剥片を素材とし、正面上縁部に荒い二次加工を施す。22は縦長剥片を素材とし、正面左側縁、下縁に連続する二次加工を施す。裏面下縁にも荒い二次加工がみられる。23は寸づまりの横長剥片を素材とし、主要剥離面である正面側には打点、打面を除去するように二次加工が施される。24は縦長剥片を素材とし、正面左側縁下半にノッチ状の二次加工を施す。正面上半部には自然面を若干残す。裏面側が主要剥離面で、ネガティブバルブを除去している。25は使用痕のある剥片。縦長剥片を素材とし、正面右側縁および左側縁下半に微細な剥落痕が認められる。正面右半には自然面を残す。裏面側はネガティブバルブを除去している。26は石核。剥片剥離作業はおのこの作業面を打面として全周から行われており、打面

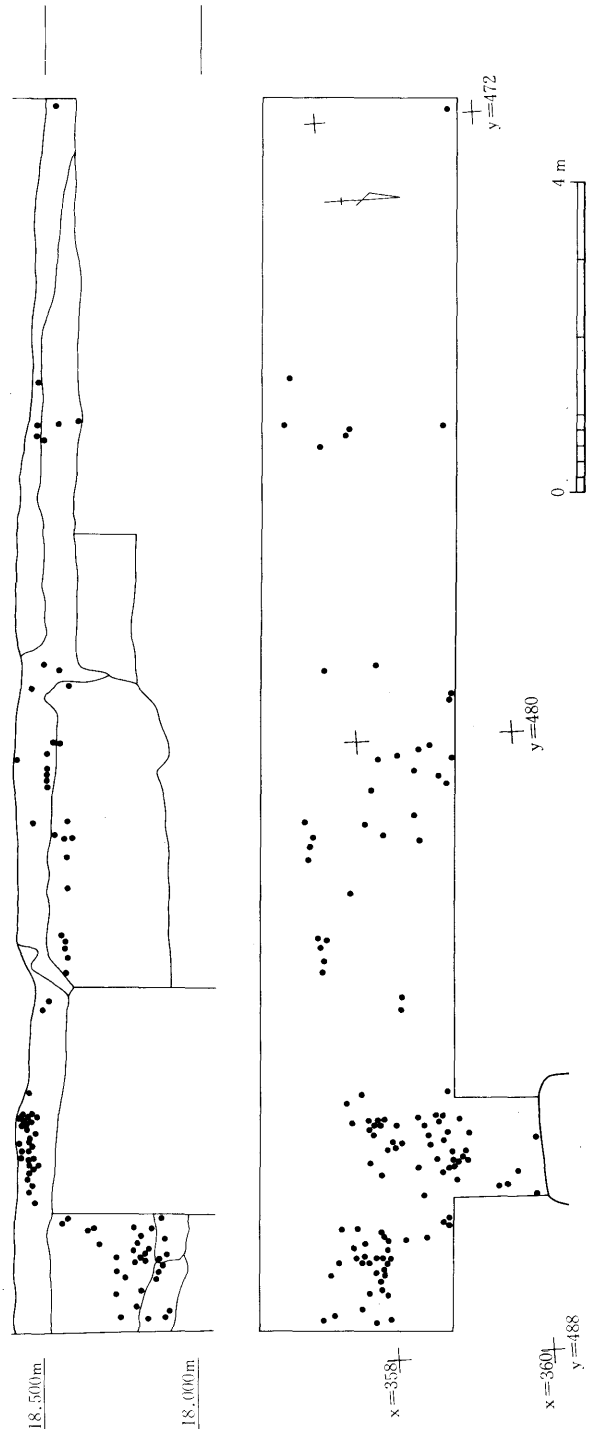


Fig. 26 Aトレンチ河川跡・包含層遺物出土状況

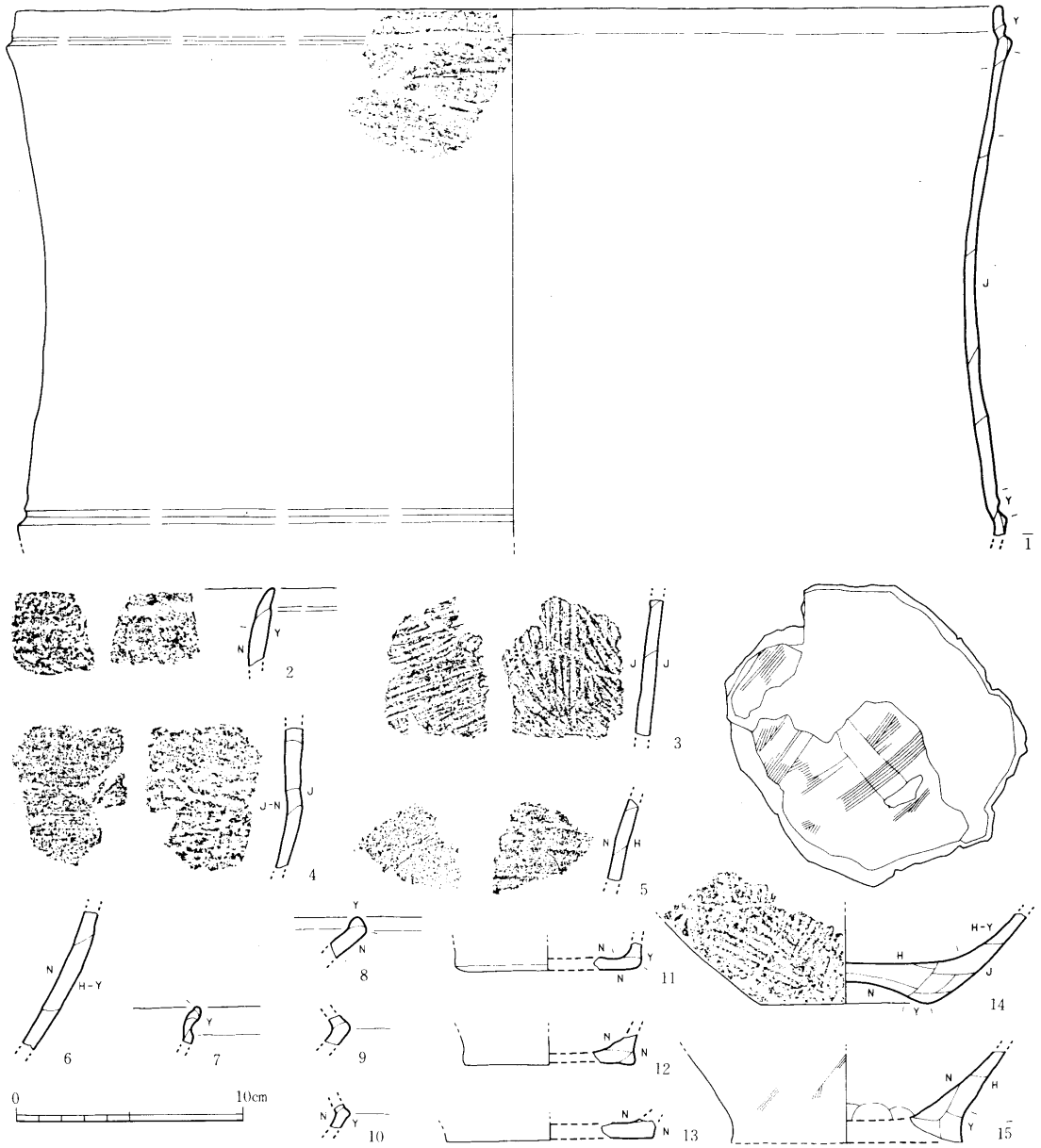


Fig. 27 包含層出土遺物実測図(土器)

の転移が著しい。目的剥片は寸づまりの小ぶりの縦長剥片であろう。

包含層出土遺物 (Fig. 27・28, PL. 19・23・24)

遺物はA～Dトレンチで約140点出土した。C・D両トレンチではきわめて少量で、大

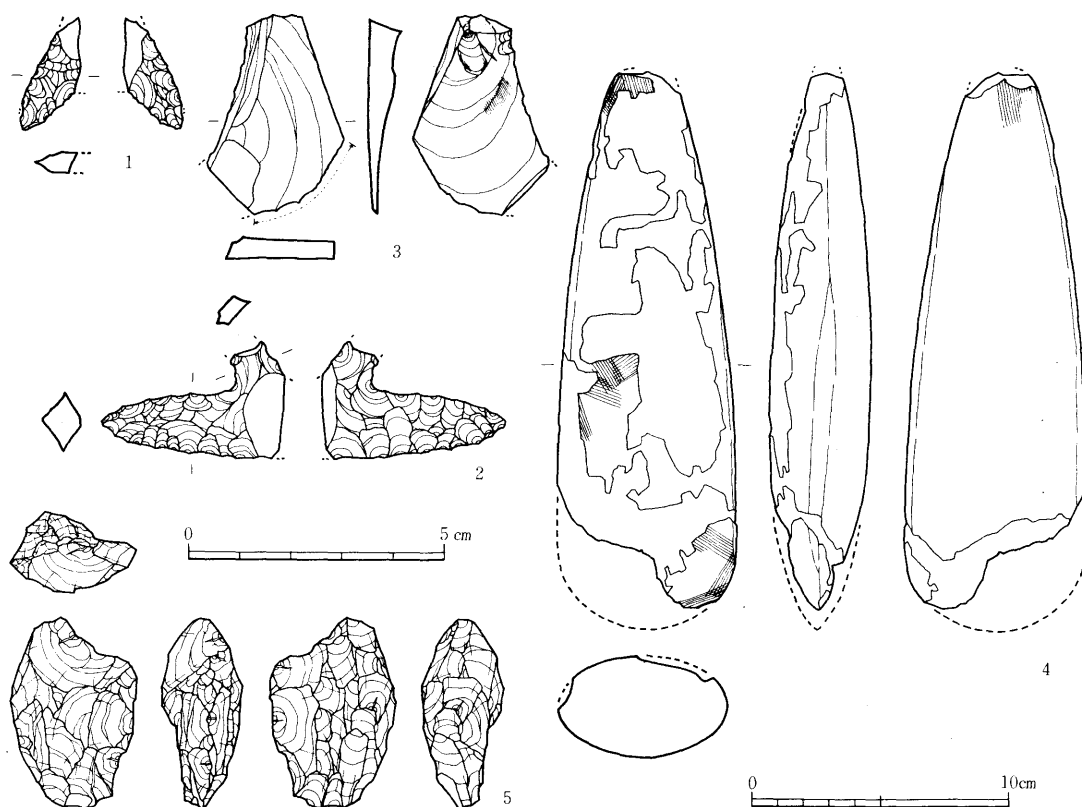


Fig. 28 包含層出土遺物実測図 (石器)

半はAトレンチ東端部、Bトレンチの6層に集中して出土した。土器は小破片が多く、図化するものは少ない。石器は剥片を含めて11点ある。

土器 (Fig. 27)

粗製の深鉢、浅鉢がある。1～6は深鉢。1は大形品で、屈曲部から外湾しながら直立ぎみに立ち上がる胴部をもち、口縁部は短く内傾する。口縁部下、胴屈曲部の突帯および口縁部に刻み目はない。2は直立ぎみにわずかに外反する口縁部をもつ。3～6は胴部。4は屈曲部に稜をもたない。3・4は内外面条痕、4はそののち内面をナデている。5は外面横刷毛目、6はそののちナデている。3・6は外面に煤が付着する。7～10は浅鉢。7は口縁部が胴部から屈曲して外側に短く開く。8は口縁端部に断面三角形の肥厚帯をもつ。9・10は胴部の屈曲部で、10は外面に明瞭な稜が認められる。11～14は底部。11はほぼ直立して立ち上がる。14はくぼみ底で、外面は荒い縦、斜め条痕、内面刷毛ののちナデで指頭圧痕が残る。岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式併行と思われ晩期中頃に位置づけられる。

石器 (Fig. 28)

石鏃、石匙、使用痕のある剥片、磨製石斧、石核、剥片がある。1はやや大形の凹基無茎式の石鏃の脚部片端。基部の抉りは比較的深く、脚端部は尖る。2は横形の石匙で、つまみ部上端、正面右半分を欠損する。素材の長軸とつまみ部の長軸とが斜交し、上下両側面に刃部をもつ。端部は尖る。正面に比べ裏面の加工は荒い。3は使用痕のある剥片で、打面には自然面を残す。正面左端部を欠損するが、下縁には微細な剥落痕が認められる。4はAトレンチと試掘調査A地区との接合資料である。刃部幅が基部幅の約3倍近くになる平面形態が撥形を呈する磨製石斧で、刃部の大半と基部を欠損する。正面の剥落が著しいが研磨は丁寧。5は石核。打面、打点は一定しておらず、剥片剥離作業面を打面とする。剥片剥離作業はほぼ全周から行われ、目的剥片は寸づまりの小形の縦、横長剥片である。

## 2 弥生時代以降の遺構・遺物

調査区北東端部を除いてほぼ全面に分布するが、後世の削平によって北端部の遺存度はよくない。検出遺構には弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡4基、古墳時代の河川跡、江戸時代の井戸2基、埋甕3基、掘立柱建物跡2棟のほか、土壇13基、溝2条、柱穴多数がある。

### 竪穴住居跡

#### 第1号竪穴住居跡 (Fig. 30, PL. 12)

調査区北西部で検出された住居跡で、第2・3号竪穴住居跡を切っており、第1号溝に切られている。北辺部は後世の削平によって消失している。平面形態は方形で、南北軸214cm以上、東西軸208cmの規模をもつが、検出面からの深さは4cmを残すにすぎない。検出面の標高は約18.60m。ほぼ平坦な床面には9個の柱穴が認められるが、床面からの深さが10cm前後で本住居跡に伴うものとは考えられない。西半中央部には平面形態が不整楕円形の66×42cm、床面からの深さ15cmの掘り込みが検出された。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、樫野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から古墳時代のものと考えられる。

#### 第2号竪穴住居跡 (Fig. 30)

第1号竪穴住居跡の西に近接する住居跡で、同住居跡に切られているが、第3号竪穴住居跡との切り合い関係は明かでない。南半部は後世の削平によって消失している。平面形態は不整円形ないしは不整楕円形で、上面径340cm以上の規模をもつ。残存状態はきわめて悪く、検出面からの深さは2cmである。検出面の標高は約18.60m。床面は平坦で、少なくとも7個の柱穴が認められる。しかし、主柱穴と考えられるのはP1ぐらいで、他



Fig. 29 弥生時代以降の遺構配置図

弥生時代以降の遺構・遺物

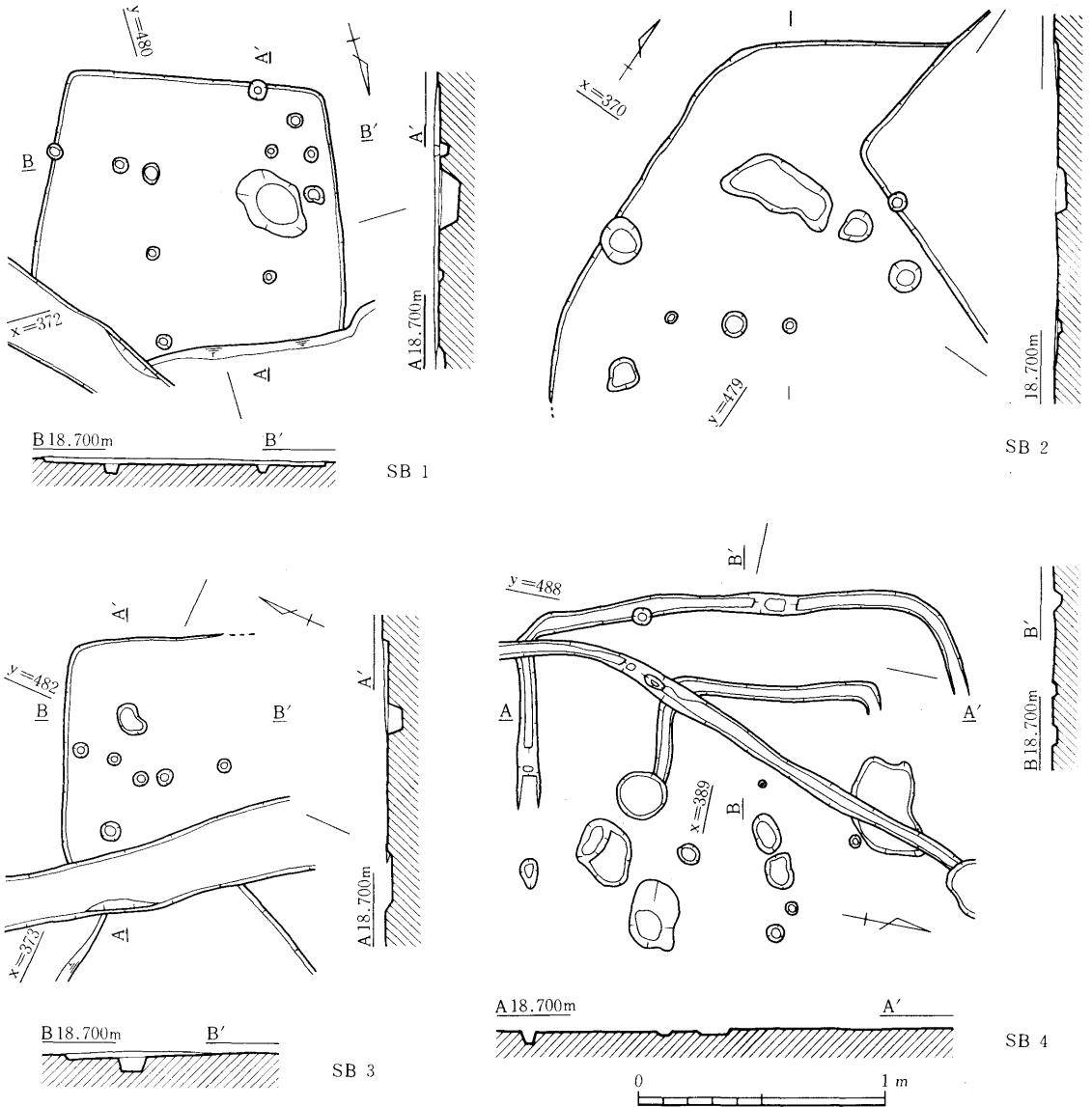


Fig. 30 竪穴住居跡実測図

は床面からの深さが10cmに以下で本住居跡に伴うものとは考えられない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、平面形態および上面径6.5m前後、床面積約30m<sup>2</sup>の規模をもつことから、樫野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から弥生時代中期から後期のものと考えられる。

第3号竪穴住居跡 (Fig. 30, PL. 12)

第1号竪穴住居跡の東に近接する住居跡で、同住居跡に切られている。南半部は後世の

削平によって消失している。平面形態は方形ないしは長方形で、南北軸172cm以上、東西軸170cm以上の規模をもち、検出面からの深さは5cmを残す。検出面の標高は約18.60m。やや北に向かって下降する床面には8個の柱穴が認められるが、第1・2号竪穴住居跡同様、床面からの深さが10cm以下で本住居跡に伴うものとは考えられない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、樫野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

#### 第4号竪穴住居跡 (Fig. 30, PL. 13)

調査区北端部で検出された住居跡で、第3号溝に切られている。後世の削平によって西半部が消失しており、壁溝のみが東半部に残存する。平面形態は方形ないしは長方形と思われる、東辺350cmの規模をもつ。壁溝の深さは検出面から5～6cmである。検出面の標高は約18.60m。また、住居内には各周壁に沿って「コ」の字状に巡る1条の溝が検出された。建て替えに伴うものと考えられ、東辺180cmの規模をもち、深さは検出面から2～3cmである。支柱穴の配置は明かではない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調および樫野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷から弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

#### 河川跡

##### 第1号河川跡 (Fig. 31, PL. 14(1))

調査区北部で検出した。中央部付近は配水管、暗渠が貫通し消失している。北東から南西に貫流し、検出した流路長は約9mである。幅約2m、検出面からの深さ約50cmの規模をもつ。検出面の標高は約18.60m。右岸側は川床まで急傾斜に落ち込むが、左岸側は川床から緩やかに立ち上がり、川岸付近に部分的に存在する狭い平坦面から急激に立ち上がる。断面形は基本的には「V」字形である。

左岸南西部には同一の流路方向をもつ幅20～30cm、深さ5～6cmの溝が検出された。攪乱坑による消失および調査区外のため一部未調査であるが、一連のものと思われ、長さは約13mである。切り合いが認められず、同河川跡の支流もしくは取水溝と考えられるが、合流点付近にはなんら取水施設は認められなかった。

埋積土は基本的に上層が粘質土ないし砂で、下層は砂と礫の互層である。

出土遺物には土師器甕、高坏、器台、手捏土器、須恵器短頸壺蓋、須恵器模倣土師器坏、打製石斧、石鏃、加工痕のある剥片がある。河川跡が縄文時代の遺物包含層を削って流れているため一部時期の遡る遺物が含まれるが、おおむね5～6世紀に機能していたものと



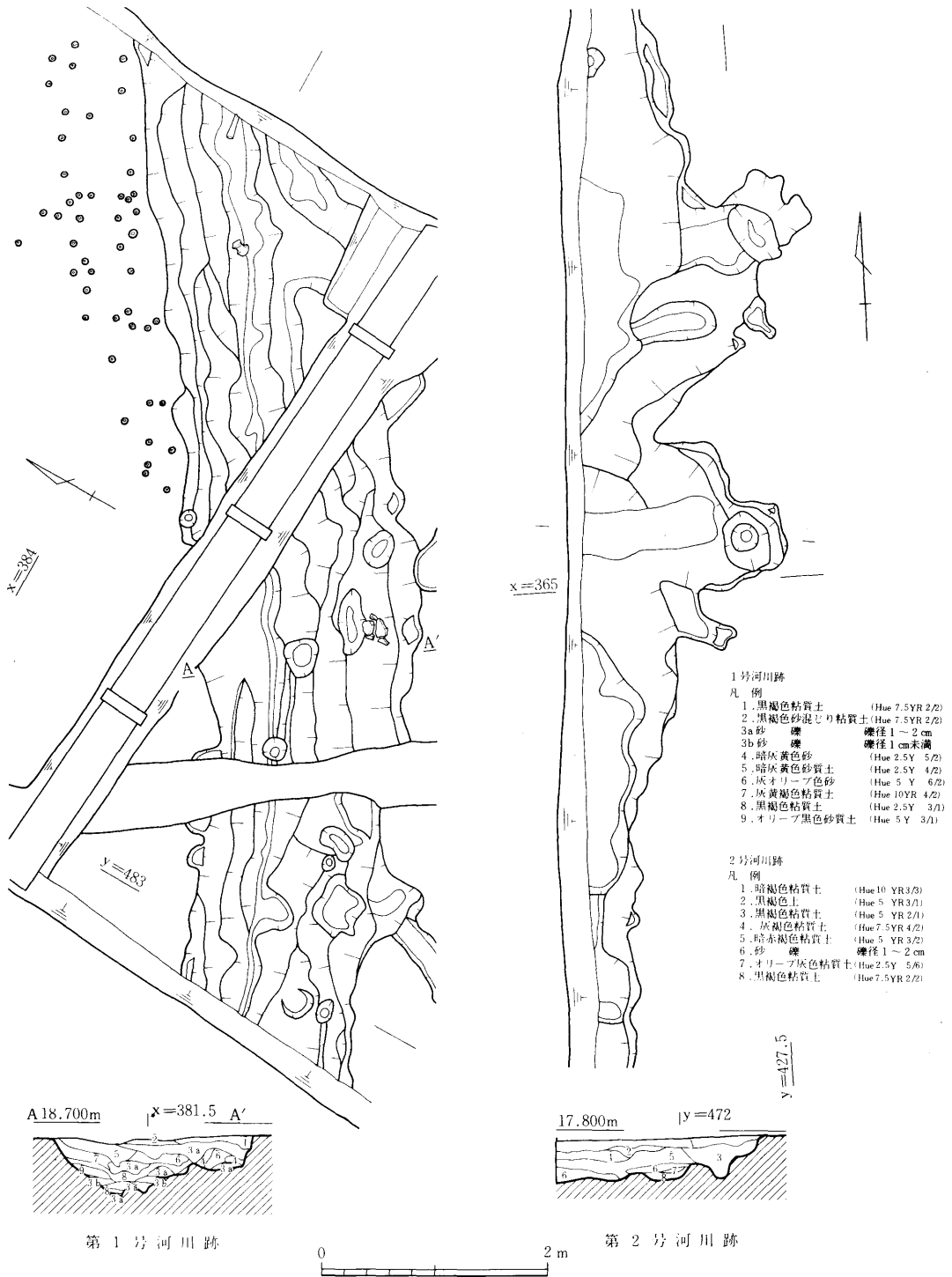


Fig. 31 第1・2号河川跡実測図

吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

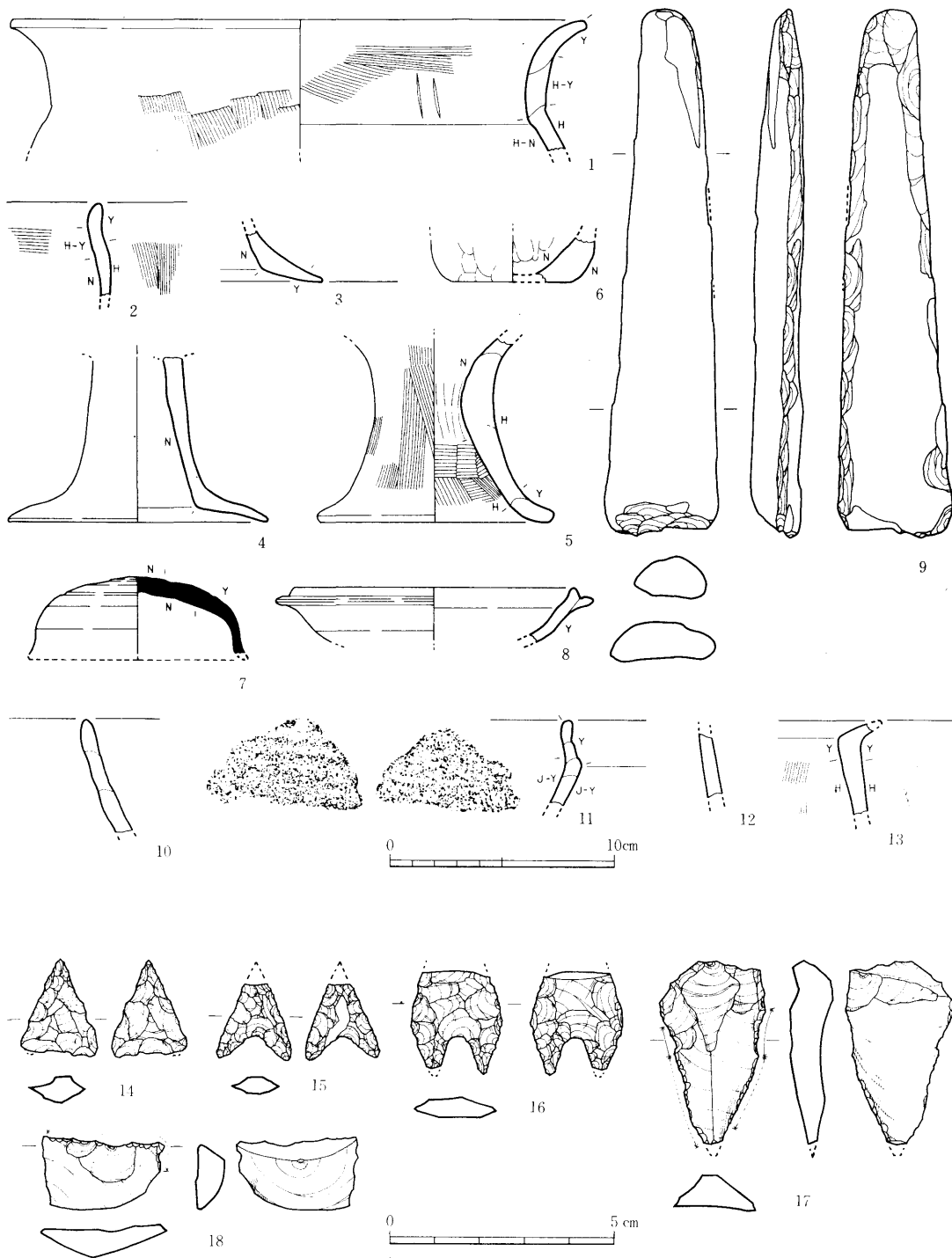


Fig. 32 第1・2号河川跡出土遺物実測図

考えられる。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 20・23・24)

土器 (1～8)

1～5は土師器。1・2は甕。1は頸部内面にわずかに稜をもち、口縁部は外湾しながら中位付近でやや強く開く。口縁部内外面の横ナデは荒く刷毛目が残る。2は小形の甕で、しまりのない頸部から直立する短い口縁部をもつ。口縁端部は丸い。3・4は高坏脚部で、裾部内面は接地せず、斜下方に開く。3は脚柱部から屈曲せず裾部にいたる。4は脚柱部が比較的長く、裾部で強く屈曲しやや内湾ぎみに開く。5は支脚で口縁部を欠損する。裾部の開きは短く、裾部付近の刷毛目は荒い。内面と外面は異なる刷毛工具を用いる。6は手捏土器の底部で、碗状のものであろう。内外面には指頭圧痕が顕著に残る。7は須恵器短頸壺の蓋。天井部から体部にゆるやかに下降し、口縁端部は短く外反するものと思われる。天井部はヘラ切り放しののち若干ナデている。体部には重ね焼きの痕跡が残る。8は須恵器模倣土師器の坏身。立ちあがりは断面三角形で、上方に短く開く。立ちあがりとは蓋受け部の境はわずかに窪む。

石器 (9・14・17)

9は片刃の打製石斧。緑簾石石英片岩を石材としていることから剥落が著しい。加工は比較的荒く、特に裏面側の頭部は大きな剥離面によって構成されている。断面形は扁平な楕円形で、頭部にむかうにつれて丸みをおびる。頭部幅2.3cm、刃部幅5.0cm。14は石鏃で平基無茎式。正裏両面とも比較的大きな剥離面によって構成される。加工は粗雑で断面形は菱形状を呈する。17は加工痕のある剥片で、下端部を欠損する。縦長剥片を素材とし、正面の左右両側縁上半には裏面側からノッチ状の二次加工を施す。正面上半中央部には上端部の一枚の剥離面を打面として加撃が行われ、素材の高まりが除去されている。また、裏面側は2枚の剥離面によってネガティブバルブが除去される。

第2号河川跡 (Fig. 31, PL. 14(2))

調査区西端部で検出した。北から南に貫流するが、右岸側は調査区外にあたるため、確認していない。検出した流路長は約15mで、幅1.8m以上、検出面からの深さ約45cmの規模をもつ。検出面の標高は約18.60m。川床は起伏に富み、北半部は流路がかなり乱れている。

埋積土は川床に約5～10cmの砂礫層が堆積している以外はすべて粘質土である。規模、位置関係、出土遺物から第1号河川跡と同一河川の可能性があるが、本稿では区分して報

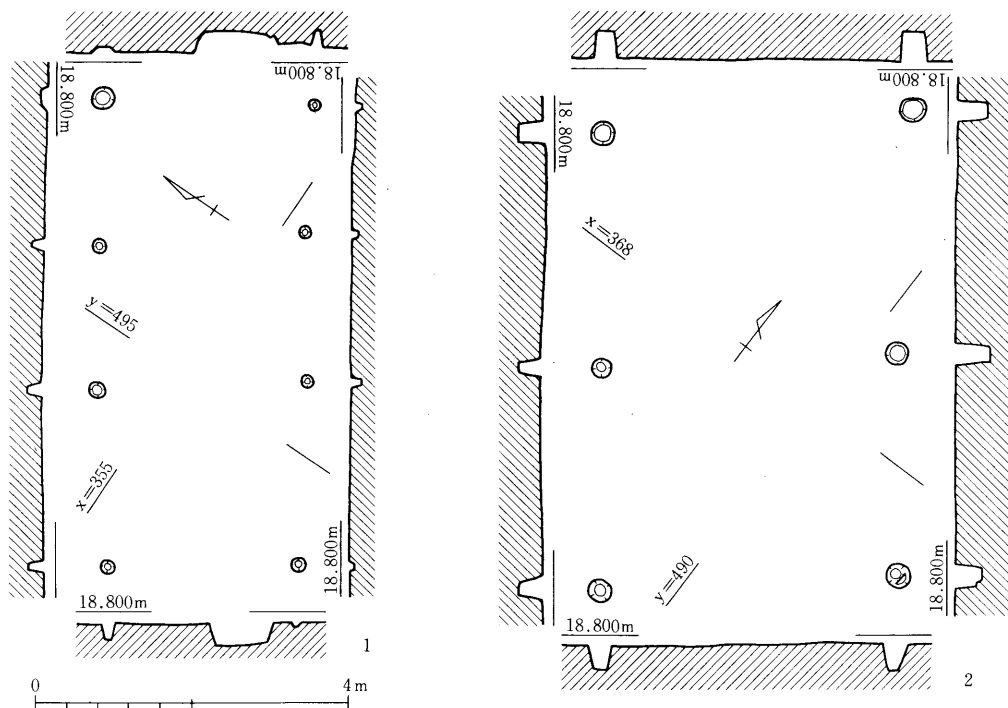


Fig. 33 掘立柱建物跡実測図

告する。

出土遺物には縄文土器深鉢、浅鉢、土師器甕、石鎌があるが、第1号河川跡と比べて量的には少ない。第1号河川跡同様、縄文時代の遺物包含層を削って流れているため、一部時期の遡る遺物が含まれるが、おおむね5～6世紀代に機能していたものと考えられる。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 20・23)

土器 (10～13)

10・11は粗製の縄文土器深鉢。10は直線的に内傾する口縁部をもち、端部は尖る。12は粗製の浅鉢。口縁部は直線的に短く内傾し、胴部との境にはわずかに稜をもつ。13は土師器甕で、「L」字状に短く外反する口縁部をもつ。

石器 (15・16・18)

15・16は凹基無茎式の石鎌。15は先端部から脚端部まで直線的に開く。脚端部は尖る。挟りの深さは5mmで、基部から全長の約1/4までである。16は脚部が外方に開かず、直立する。端部は尖る。先端部、脚部の片方を欠損する。挟りは深く、挟り部幅10mm、挟りの深さは8mmである。挟りの最深部は一枚の大きな剝離面によって構成される。裏面上半中央部には素材面を残す。18は使用痕のある剝片。素材は打面に自然面を残す横長剝片で、

正面、右側縁部上端部に細かな剥落痕が認められる。

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

(Fig. 33-1, PL. 15(1))

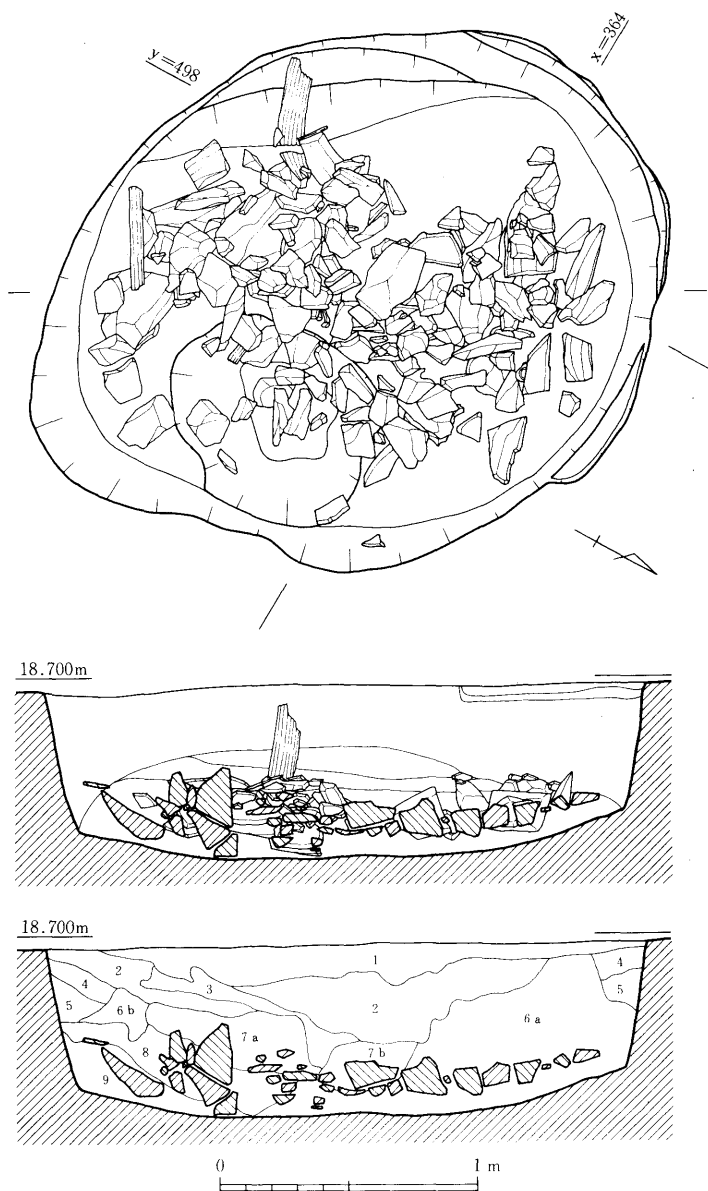
調査区南東部で検出した身舎1間×3間の建物跡である。棟方向に平行に現代の暗渠が走る。検出面の標高は約18.65～18.70m。北隅を起点として、桁行長6.0m、梁行長2.8mの規模をもつ。棟方向は北東-南西で、N-54°-E。桁方向の柱間距離は平均約2mで、柱穴の上面径は15～20cm、深さは20cmのものが多い。柱穴の埋土はオリーブ褐色粘質土(Hue2.5Y4/4)。

出土遺物はないが、第2号井戸に近接して位置することから17世紀頃のものと思われる。

第2号掘立柱建物跡

(Fig. 33-2, PL. 15(2))

調査区の中央部付近で検出した身舎1間×2間の建物跡である。検出面



- 凡例
- 1 オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y 4/4)
  - 2 暗オリーブ褐色土 (Hue 2.5Y 3/3) 本炭をブロックで含む
  - 3 暗灰黄色砂礫 (Hue 2.5Y 4/2)
  - 4 黒褐色粘質土 (Hue 2.5Y 3/1) 本炭を含む
  - 5 オリーブ灰色粘土 (Hue 10 Y 5/2)
  - 6 a オリーブ黒色砂礫 (Hue 7.5Y 3/2)
  - 6 b 灰オリーブ色砂礫 (Hue 5 Y 4/2)
  - 7 a 暗オリーブ色粘土 (Hue 5 Y 4/3)
  - 7 b オリーブ黒色粘土 (Hue 7.5Y 3/1)
  - 8 オリーブ黒色粘土 (Hue 7.5Y 3/2)
  - 9 オリーブ黒色礫 (Hue 7.5Y 3/2)

Fig. 34 第1号井戸実測図

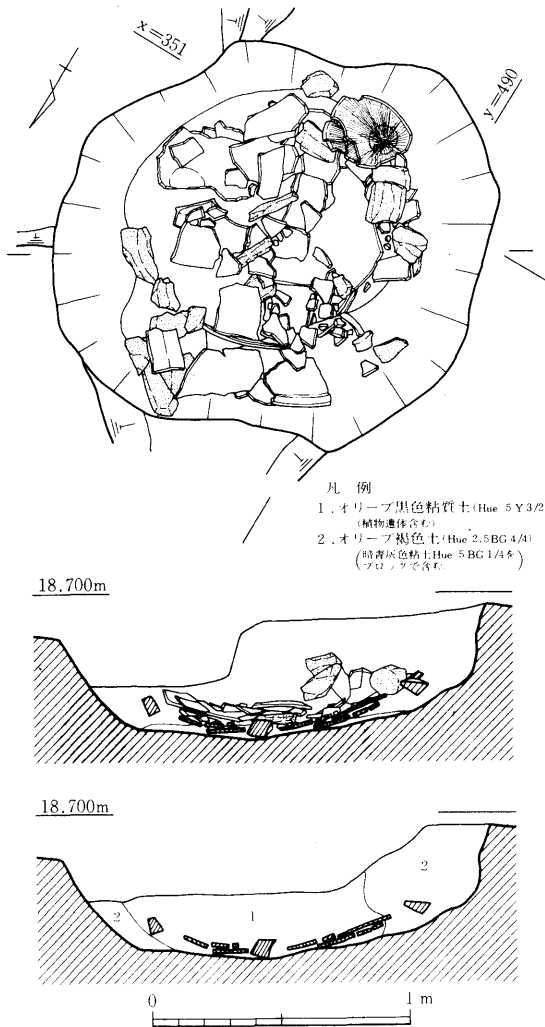


Fig. 35 第2号井戸実測図

検出面の標高は約18.65m。

出土遺物には陶器鉢、碗のほか曲物底板、棒状木製品、篋状竹製品および植物遺体がある。17世紀代。

出土遺物 (Fig. 36・37, PL. 20・24)

土器 (Fig. 36-1・2)

1は口縁部外面が玉縁状に肥厚する鉢で、端部は口禿である。2は二段状の高台をもつ碗で、高台側面より上位に施釉する。内面見込みの一部に自然釉がかかる。高台側面には3個の円錐トチが付着する。

の標高は約18.70m。北隅を起点として、桁行長6.0m、梁行長4.2mの規模をもつ。棟方向は北西-南東で、 $N-36^{\circ}-W$ 。桁方向の柱間距離は平均約3.1mで、柱穴の上面径は20~30cm、深さは30~40cm。柱穴の埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5 Y 4/4)。

出土遺物はないが、第1号井戸に近接して位置することから17世紀頃のものであろう。

### 井戸

#### 第1号井戸 (Fig. 34, PL. 16(1))

調査区東半の中央部付近に位置し、谷状の落込みの埋土上面が検出面である。平面形態は円形に近い楕円形で、上面径2.5×2m、底面径2.2×1.5mの規模をもつ。壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。底面は西から東に下降しており、東端部では底面から深さ約10cmの円形状の落ち込みが認められる。検出面からの深さは最浅部で約35cm、最深部で約75cmである。底面には多数の自然石が散乱している。

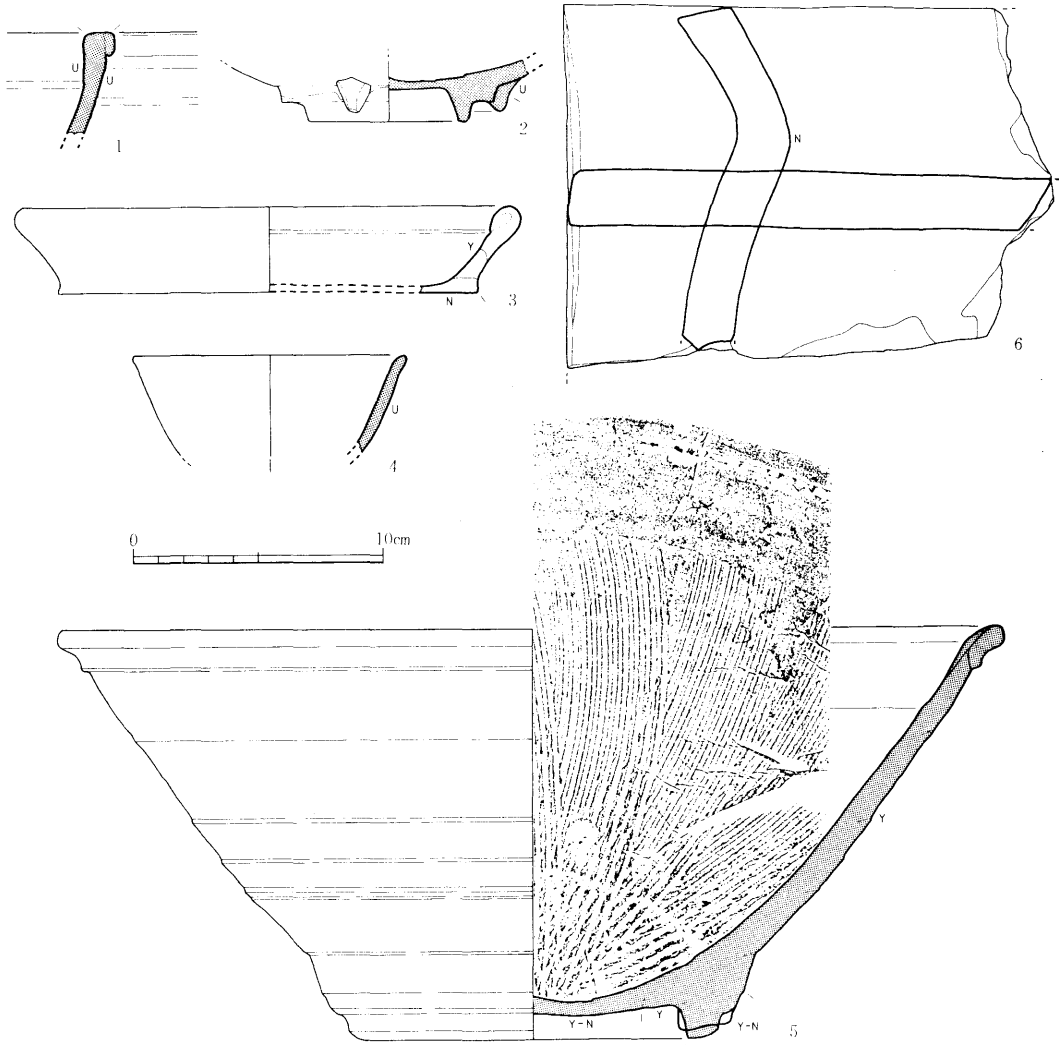


Fig. 36 井戸出土遺物実測図（1・2-第1号井戸 3～6-第2号井戸）

木・竹製品 (Fig. 37)

1は楕円形曲物の底板で、下半部を欠損する。横木どりで、側板をあてるために、周縁の内側を一段低くつくり出す。目釘穴は認められない。2は棒状木製品。農工具の柄の可能性はあるが、下半部を欠損するため明かでない。両側縁は面取り状に加工し、断面形は頭部が扁平な楕円形、中位以下が楕円形を呈する。頭部への敲打痕はない。縦木どり。3、4は竹製で同一品と考えられるが、接合しなかった。3は頭部に目釘穴をもち、上端に紐ずれと思われる横方向の擦過が残る。左側面は火熱を受け煤が付着する。4は上端部に

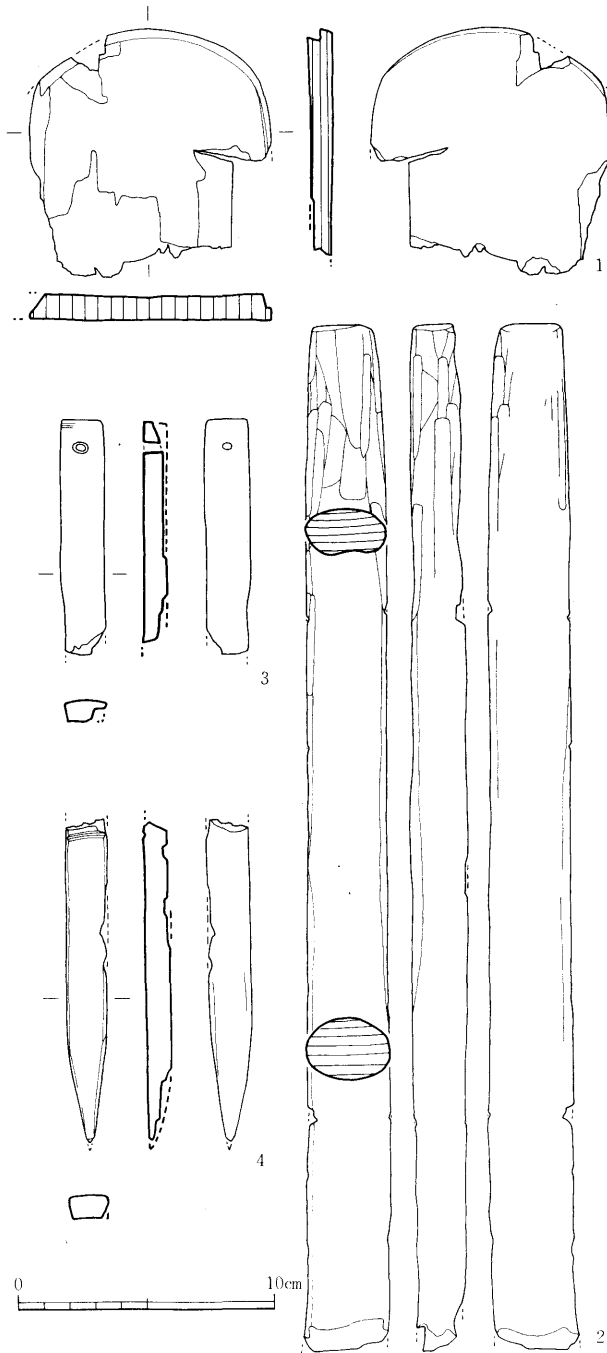


Fig. 37 第1号井戸出土遺物実測図

節をもち、下端部は左右両側面および裏面を加工し、尖らせる。二点とも左右両側面を面取りし、正面は素材面を残す。

第2号井戸

(Fig. 35, PL. 16(2))

調査区南端の中央部付近に位置し、第1号井戸同様、谷状の落ち込みの埋土上面が検出面である。本学統合移転前の水田に伴う暗渠によって東半部を若干削平されている。平面形態は円形に近く、上面径1.5~1.8m、底面径0.9~1.2mの規模をもつ。壁面は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は挿鉢状を呈する。検出面からの深さは約50cmである。底面には自然石とともに土師質土器の甕一個体分が投げ込まれている。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には土師質土器盤・甕、磁器碗、陶器挿鉢および植物遺体がある。17世紀前半。

出土遺物 (Fig. 36-3~6、Fig. 38, PL. 20・25)

3は土師質土器の盤で、口縁端部を内側に巻き込み肥厚させる。

4は磁器碗で、口縁端部がわずかに外反する。5は陶器挿鉢。口縁部は短く外反し、内面には12本単



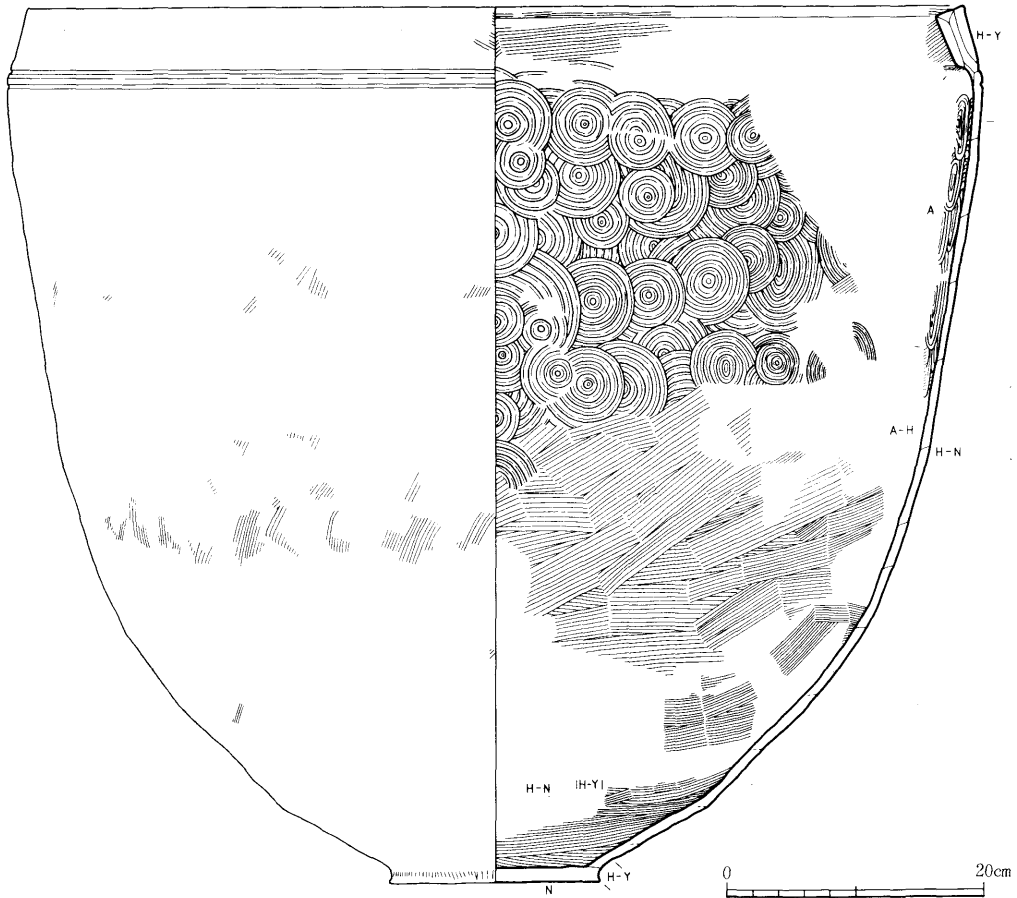


Fig. 38 第2号井戸出土遺物実測図

位の櫛歯描き上げを重ねながら左方向に施す。畳付きは無施釉で、一箇所を指頭による指圧によって切り高台状に窪ませる。底部と体部の境付近の内面には重ね焼き時の放れ砂が付着する。6は棧瓦で葺足長は不明。凹面は縦方向、凸面は横方向ナデ。前・側端部は縁に沿ってナデる。金雲母を多く含む。

Fig. 38は土師質土器の大甕。口縁部は肥厚し、直線的に内傾する。端部は平坦。頸部外面には二条の浅いヘラ描き沈線を施し、内面には段をもつ。幅約5～6cmの粘土帯を輪積み成形するが、法量にくらべて器壁が薄い。胴部から頸部はタタキによる調整で、内面上半部には同心円の当て具痕がそのまま残るが、下半部はそののち横、斜め刷毛を施す。外面は刷毛目ののちに荒いナデが行われており、タタキの種類は明かでない。他に寛永通宝1枚 (Fig. 43-1) がある。

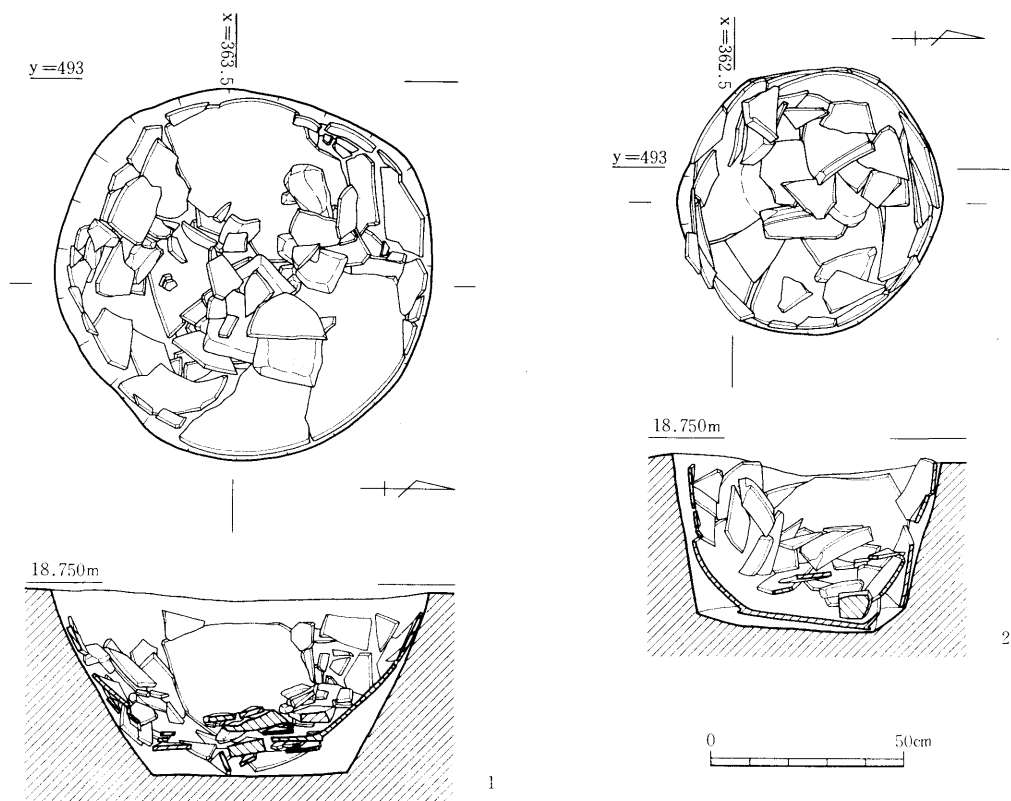


Fig. 39 第2・3号埋甕土壙実測図

### 埋甕土壙

試掘調査時とあわせて3基検出したが、後世の削平によって下半部しか残存しない。いずれも単独で存在し、土壙を共有することはない。

#### 第1号埋甕 (Fig. 40-1・2, PL. 21)

試掘調査時に出土したもので、出土地点から第2・3号埋甕土壙の南に近接して存在したものである。

1・2は土師質土器で、同一個体であろう。1は口縁部で外湾しながら内傾し、端部は肥厚する。頸部には一条の浅いヘラ描き沈線がめぐる。頸部以下はタタキによる調整で、内面は同心円の当て具痕がそのまま残るが、外面はそののち横方向のミガキを施す。2は底部で、内底面は周縁に沿って円形に刷毛目が施される。

#### 第2号埋甕土壙 (Fig. 39-1・Fig. 40-3, PL. 17(1)・25)

調査区中央部よりやや東で検出した。平面形態は円形で、上面径約95cm、深さは検出面から48cmを残す。甕は底面から若干上位に据えられている。内部には自然石が落ち込んで

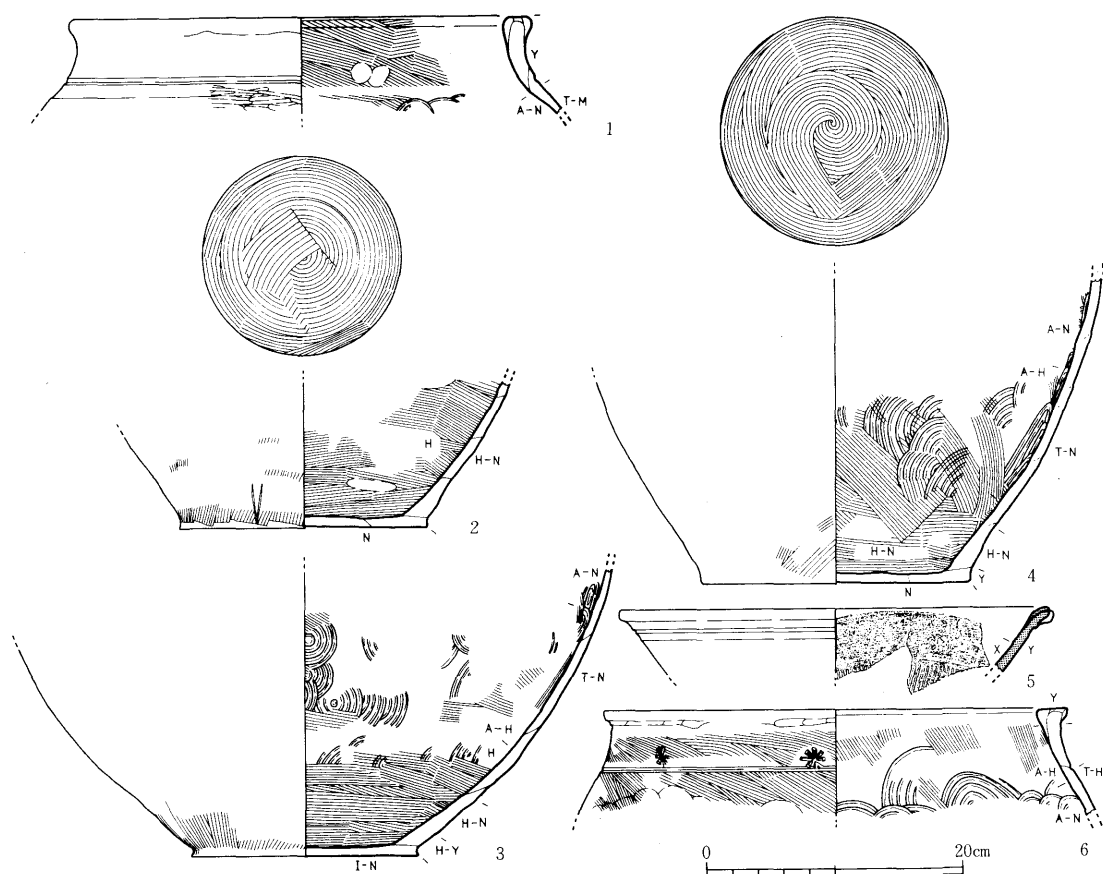


Fig. 40 第2・3号埋甕および出土遺物実測図

おり、口縁部は認められない。検出面の標高は約18.75m。埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5Y 4/4)。甕は土師質で、胴部はタタキによる調整で、内面には同心円の当て具痕がそのまま残るが、底部付近はそののち横刷毛目を施す。外面は縦刷毛目ののちさらに荒いナデが行われる。内底面の調整は第1号埋甕と同様で、外底面は板目圧痕が残る。

第3号埋甕土壙 (Fig. 39-2・40-4~6, PL. 17(2)・21・25)

第2号埋甕土壙の約1m西で検出した。平面形態は円形で、上面径約70cm、深さは検出面から48cmを残す。甕はほぼ底面に据えられており、内部には口縁部が落ち込んでいる。検出面の標高は約18.75m。埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5Y 4/4)。4・6が埋甕で、土師質。4は胴部が底部から比較的急に立ち上がる。内外面の調整は第2号埋甕と同様であるが、外底面には板目圧痕は認められない。6は第1号埋甕の口縁部と器形、調整ともほぼ同様であるが、口縁端部は面をもち、外面に菊花のスタンプ文を施文する。5は内部

から出土した陶器播鉢。口縁部は短く緩やかに外反し、指押えによって注口部を作り出す。  
溝

2条検出した。後世の削平が著しく、部分的にしか検出できなかった。出土遺物もなく  
時期は明らかでない。

#### 第1号溝 (Fig. 29)

調査区北端部をほぼ南北に走り、第4号竪穴住居跡を切っている。検出した長さは約  
7mである。幅約10~15cm、検出面からの深さ約4cmを残す。検出面の標高は約18.60m。  
出土遺物はない。

#### 第3号溝 (Fig. 29)

調査区中央部を北西-南東に走る。検出した長さは約3mで、幅約15~20cm、検出面か  
らの深さ約2~4cm。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には石鎌がある (Fig. 41-12)。

#### 暗渠 (Fig. 29)

8条を検出した。本学統合移転前に開かれていた水田に伴うもので、内部から古墳時代  
から江戸時代の遺物が出土した。

#### 暗渠出土遺物 (Fig. 41-1~11・13・14, PL. 21・22・25)

1は土師器甕。頸部内面に稜をもたず、口縁部は外湾しながら短く緩やかに外反する。  
2は須恵器の高坏。坏部は浅く、内湾しながら開き、上半部でやや急に立ち上がる。内面  
には重ね焼きの痕跡がみられる。短脚の裾部は断面鳥嘴状となる。3~6・14は土師質土  
器。3・4は火舎。3は口縁端部が短く内傾し、内面には沈線状の段をもつ。外面には菊  
花のスタンプ文を施文する。4は獣足の支足をもつ底部で、足数は破片のため不明。外底  
面には板目圧痕が認められる。いずれも内外面には煤が付着する。5・6は盤。5は直線  
的に開く体部を底部側面に貼付する。口縁端部は内巻き気味に直立し、やや肥厚する。14  
は甕。口縁部は肥厚して直立し、端部は面取り状に平坦。頸部外面にはヘラ描きの浅い二  
条の沈線が巡る。内外面の調整は第2号井戸出土のものと同様である。7~10は陶器。7  
は鉢で、口縁部は玉縁状に肥厚し、端部は口禿となる。8は備前系の播鉢。内面には14本  
を単位とする櫛歯描き上げを重ねながら右方向に施す。低い削り出し高台で、畳付は狭い。  
体部上半、外底面および畳付には煤が付着し、火災による投棄を思わせる。9~11は染付  
碗。口縁部に二条、体部下半に一条の圈線が巡り、その間に粗雑な唐草文を絵付している。  
ほぼ全面に貫入がみられ、狭い畳付は無施釉。10は高台外面脇にも一条の圈線が巡る。11

弥生時代以降の遺構・遺物

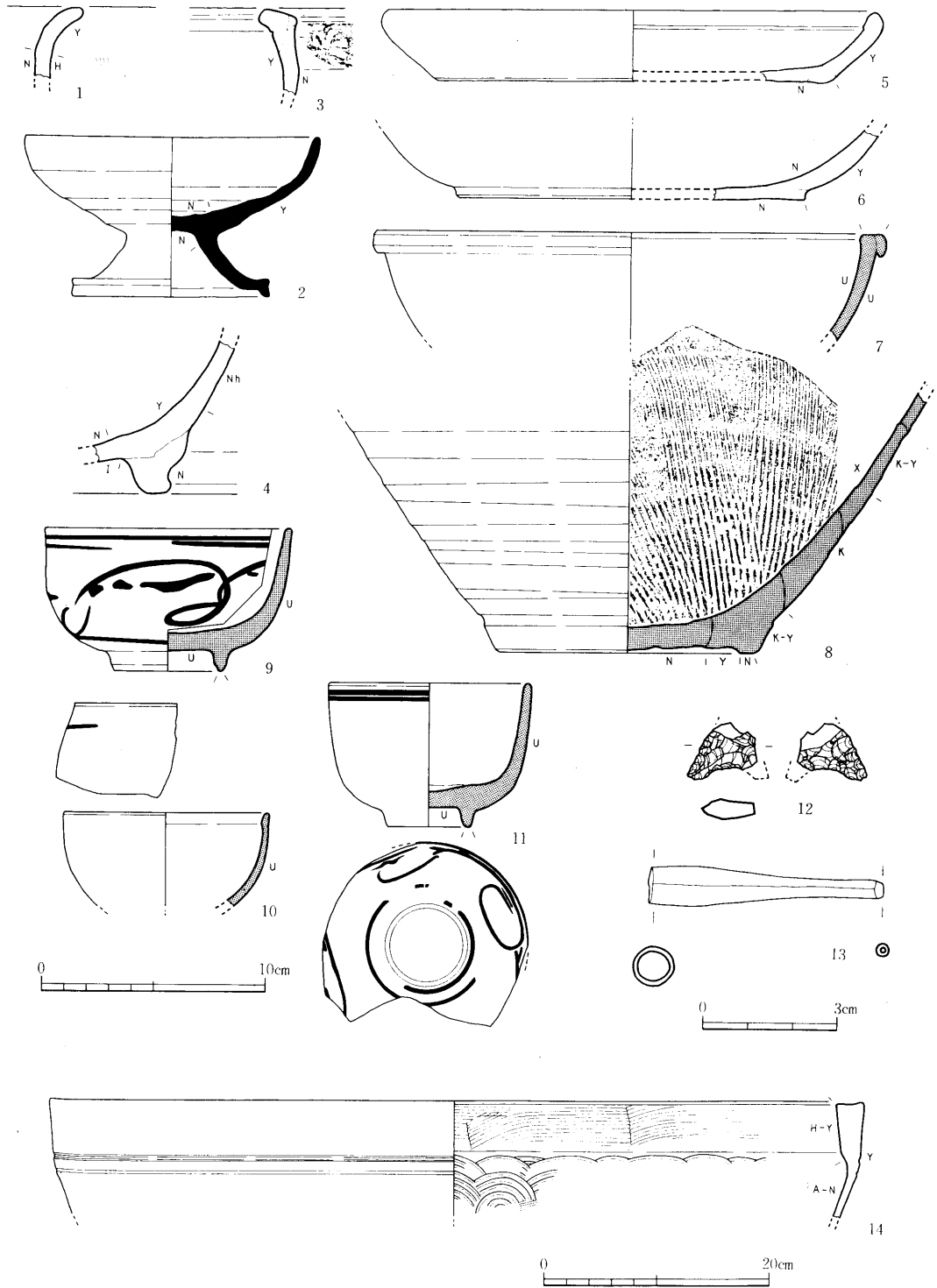


Fig. 41 溝・暗渠出土遺物実測図

Tab. 3 土壙一覧表

土壙番号	規模(cm)			平面形態	埋土色調	備考
	長軸	短軸	深さ			
SK 1	152	62	2	楕円形	褐色粘質土 (7.5YR 4/6)	
SK 2	70	48	3	不整楕円形	〃	SD 1 を切る
SK 3	70	46	8	楕円形	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK 4	94	38	3	〃	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK 5	114	70	4	不整楕円形	〃	NR 1 を切る
SK 6	198	68	5	不整形	〃	
SK 7	100	74	2	〃	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK 8	76	46	3	〃	〃	
SK 9	84	76	3	楕円形	褐色粘質土 (7.5YR 4/6)	土師器
SK10	166	108	4	不整形	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK11	222	84	2	不整楕円形	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK12	92	44	9	楕円形	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK13	168	166	3	方形or長方形	〃	

は口縁部外面に圏線状の絵付を施す。呉須は 9 が暗オリーブ灰色 (Hue 5 GY 4/1)、10 が暗青灰色 (Hue 5 PB 4/1)、11 がオリーブ灰色 (Hue 10Y 4/2) である。13 は煙管の吸口。一枚の板を折り曲げ、肩をもたない。真鍮製。Fig.43-2 は寛永通宝。第 5 号暗渠出土。1・13 は第 2 号暗渠、3・5・9 は第 3 号暗渠、4 は第 4 号暗渠でその他は第 8 号暗渠出土。

#### 土壙 (Fig. 29)

13 基検出した。埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5Y 4/4) のもの (第 4 ~ 6・10・12・13号土壙)、黒褐色粘質土 (Hue 2.5Y 3/2) のもの (第 3・7・8・11号土壙)、褐色粘質土 (Hue 7.5YR 4/6) のもの (第 1・2・9号土壙) の三種がみられる。平面形態は楕円形に近いもの (第 1・3・4・12号土壙)、方形のもの (第 9・13号土壙)、不整形のもの (第 2・5 ~ 8・10・11号土壙) がある。オリーブ褐色粘質土の埋土をもつものは調査区北半部に集中する。規模は最大の第 13 号土壙で長短両辺とも、170cm 以上、最小の第 8 号土壙で長軸約 76cm、短軸約 46cm である。検出面からの深さは 2 ~ 5 cm のものが多く、残りの最も良い第 12 号土壙でも 9 cm を残すに過ぎない。

出土遺物はほとんどなく、わずかに第 13 号土壙から古墳時代の土師器が出土した。埋土の色調からすべて古墳時代以降のものであろう。

第 4・5 層出土遺物 (Fig. 42-1 ~ 9・11・12, PL. 22・24)

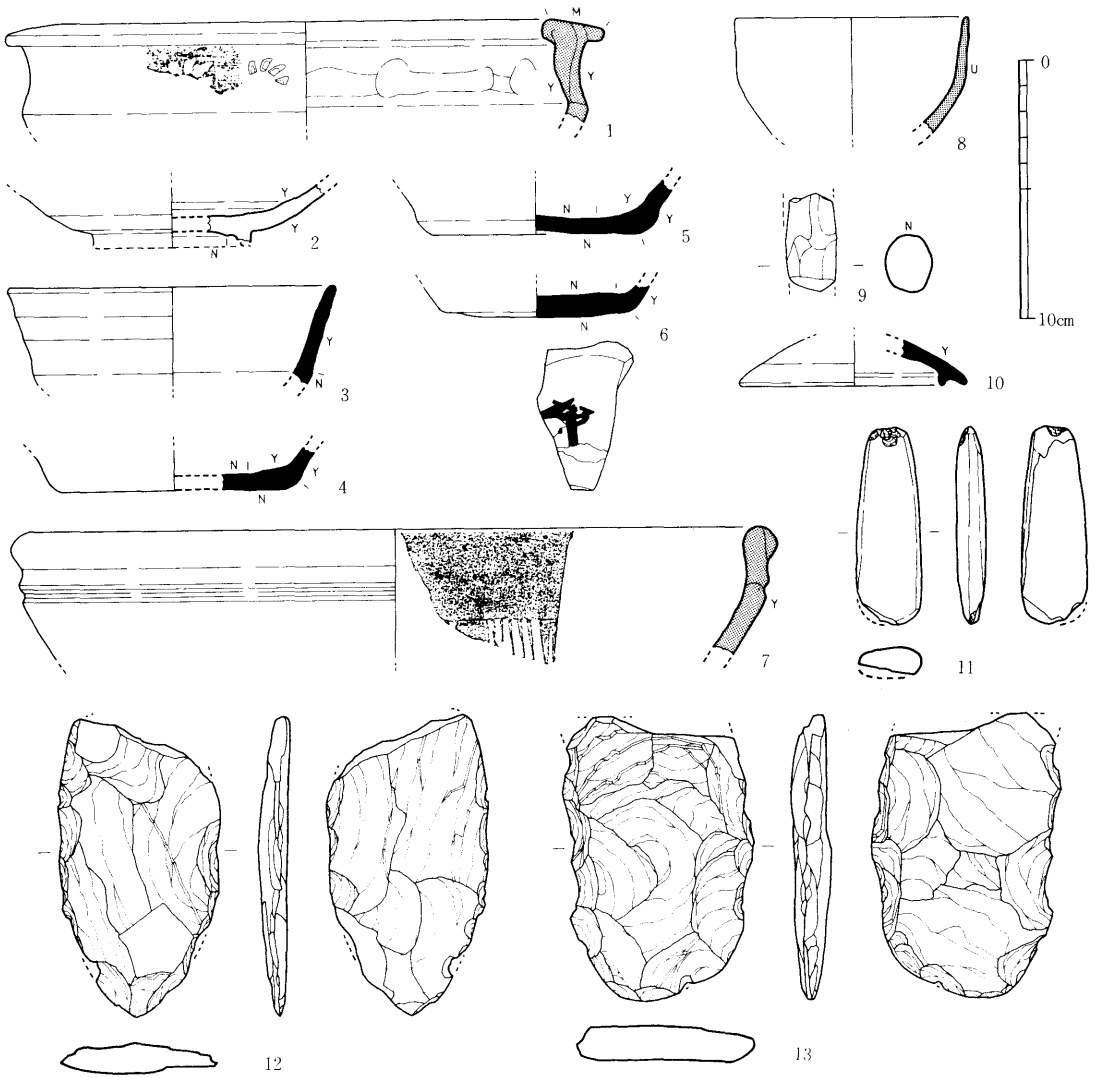


Fig. 42 第4・5層およびその他の出土遺物実測図

各層から土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器が出土した。古墳時代から江戸時代にかけての各時代のものが混在する。1は陶器の壺。口縁部は外湾しながら直立し、端部を斜上下の両方に拡張させる。端部は平坦で、ヘラミガキを行う。口縁部外面には菊花のスタンプ文を施文する。4層出土。



Fig. 43 出土銭貨拓影（1—第2号井戸  
2—第5号暗渠 3—第5層）

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査

Tab. 4 出土遺物観察表

法量( )は復原値

No	器 種	法 量 (cm) (①口径②底径③器高)	色 調 (①外面②内面)	胎 土	焼 成	備 考
落し穴 (Fig. 22)						
1	縄 文 土 器		①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②黒褐色(5 YR3/1)	良	良 好	
河川跡 (Fig. 23)						
1	縄文土器 深鉢or浅鉢		赤褐色(5 YR4/8)	良	良 好	
2	縄文土器 深鉢or浅鉢		灰褐色(5 YR5/2)	不 良	精 良	
3	縄文土器 深鉢or浅鉢		①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良	良	胎土に結晶片岩を多く含む
4	縄文土器 深鉢or浅鉢		黄灰色(2.5 Y5/1)	不 良	良 好	
5	縄文土器 深鉢or浅鉢		①灰色(5 Y4/1) ②橙色(5 YR6/8)	不 良	精 良	
6	縄文土器 深鉢or浅鉢		黒褐色(7.5YR3/1)	不 良	良	
7	縄文土器 深鉢or浅鉢		橙色(5 YR6/8)	良	良 好	
8	縄文土器 浅鉢		①橙色(7.5YR6/8) ②浅黄色(2.5 Y7/3)	不 良	良 好	波状口縁
9	縄 文 土 器	② (3.0)	①淡黄色(5 Y8/3) ②灰白色(2.5 Y8/2)	不 良	良	
10	縄 文 土 器	② (6.4)	灰白色(2.5 Y8/2)	良	良 好	
谷状遺構 (Fig. 25)						
1	縄 文 土 器 甕		淡黄色(2.5 Y8/3)	やや不良	やや不良	外面に煤付着
2	縄 文 土 器 甕		①灰白色(7.5 Y8/1) ②黒褐色(10YR3/1)	不 良	良	突帯の下位に穿孔
3	縄 文 土 器 甕		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②浅黄色(2.5 Y7/3)	不 良	不 良	
4	縄 文 土 器 甕		①淡黄色(2.5 Y8/3) ②褐色(7.5YR5/1)	不 良	良 好	
5	縄 文 土 器 甕		灰白色(2.5 Y8/2)	やや不良	良	
6	縄 文 土 器 浅鉢	② 3.4	浅黄色(2.5 Y8/4)	不 良	良 好	
7	縄文土器甕or深鉢	② (7.5)	①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	不 良	良 好	
8	縄文土器甕or深鉢	② (7.8)	①淡黄色(2.5 Y8/3) ②灰褐色(5 YR5/2)	不 良	良	
9	縄文土器甕or深鉢	② (8.6)	淡黄色(2.5 Y8/3)	不 良	良	
10	土 師 器 甕		褐色(7.5YR4/3)	やや不良	良	
11	土 師 器 高 坏		黄色(2.5 Y8/6)	良 好	やや不良	
12	須 恵 器 甕		①青灰色(10BG6/1) ②灰白色(N7/0)	やや不良	良 好	
第6層 (Fig. 27)						
1	縄 文 土 器 深鉢	① (43.4)	①白灰色(5 Y7/2) ②褐色(7.5YR4/3)	不 良	不 良	
2	縄 文 土 器 深鉢		①白灰色(10YR7/1) ②灰褐色(7.5YR4/2)	やや不良	良 好	
3	縄 文 土 器 深鉢		①褐色(7.5YR5/1) ②黒色(5 Y2/1)	良 好	精 良	外面に煤付着
4	縄 文 土 器 深鉢		①にぶい赤褐色(5 YR4/3) ②灰色(5 YR5/1)	良 好	良 好	
5	縄 文 土 器 深鉢		①浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい赤褐色(5 YR4/4)	不 良	良	
6	縄 文 土 器 深鉢		①褐色(10YR6/1) ②灰白色(2.5 Y8/2)	良 好	良 好	外面に煤付着
7	縄 文 土 器 浅鉢		明赤褐色(5 YR5/6)	良 好	良 好	
8	縄 文 土 器 浅鉢		明赤褐色(5 YR5/6)	良 好	良 好	
9	縄 文 土 器 浅鉢		①棕色(10YR6/8) ②灰白色(2.5 Y7/1)	不 良	不 良	



弥生時代以降の遺構・遺物

法量( )は復原値

No	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	焼成	備考
10	縄文土器 浅鉢		灰黄色 (2.5Y7/2)	不良	良	
13	縄文土器 ② (9.1)		①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②淡黄色(2.5Y8/4)	良好	良	
14	縄文土器 ② 7.2		①黒色(7.5YR5/1) ②褐灰色(5Y2/1)	不良	精良	
15	縄文土器 ② (10.1)		①褐色(7.5YR4/6) ②黒褐色(2.5Y3/1)	不良	不良	胎土に結晶片岩を多く含む
第7層 (Fig. 27)						
11	縄文土器 ② 7.0		赤灰色 (2.5YR5/1)	良好	良	
12	縄文土器 ② 7.4		浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	良好	胎土に結晶片岩を多く含む
河川跡 (Fig. 32)						
1	土師器 甕 ① (25.4)		①にぶい橙色(2.5YR6/4) ②にぶい橙色(5YR6/4)	良好	良好	
2	土師器 甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	不良	良好	
3	土師器 高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	良好	
4	土師器 高坏 ② (11.4)		淡黄色 (2.5Y8/3)	精良	良好	
5	土師器 支脚 ② 10.2		淡黄色 (2.5Y8/3)	不良	良好	
6	土師器 手捏土器 ② 10.6		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	良好	
7	須恵器 短頸壺蓋		①灰白色(N8/0) ②灰白色(N7/0)	精良	良好	体部外面に重ね焼きの痕跡
8	須恵器模倣土師器 坏身 ① 12.3		①灰白色(10Y7/1) ②暗青灰色(5B3/1)	精良	良好	
10	縄文土器 深鉢		①にぶい橙色(10YR6/3) ②褐灰色(10YR4/1)	良好	良好	
11	縄文土器 深鉢		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②淡黄色(2.5Y7/2)	やや不良	良好	
12	縄文土器 浅鉢		①灰白色(10YR7/1) ②褐灰色(7.5YR6/1)	良好	良好	
13	土師器 甕		①にぶい橙色(5YR6/4) ②浅黄褐色(10YR8/4)	良好	やや良好	
第1号井戸 (Fig. 36)						
1	施釉陶器 鉢		素地-褐灰色(10YR6/1) 釉-黒褐色(7.5YR2/2)	良好	良好	口禿
2	陶器 碗 ② 6.2		素地-にぶい黄褐色(10YR7/3) 釉-暗赤褐色(2.5YR3/4)	やや不良	良好	円錐トチ付着
3	土師質土器 盤 ① 19.4		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	良好	
4	磁器 碗 ① 11.0		素地-灰白色(5Y7/1) 釉-オリーブ褐色(2.5Y4/6)	良好	良好	
5	陶器 插鉢 ① 37.6		素地-赤色(10R5/8) 釉-暗赤褐色(7.5Y3/2)	精良	良好	底部内面に重ね焼きの離れ砂付着
第2号井戸 (Fig. 38)						
1	土師質土器 甕 ① 73.0		浅黄褐色 (7.5YR8/4)	良好	良好	
埋糞土坑 (Fig. 40)						
1	土師質土器 甕 ① 35.6		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
2	土師質土器 甕 ② 19.6		①橙色(2.5YR7/6) ②淡褐色(5YR8/4)	良好	良好	
3	土師質土器 甕 ② 17.8		にぶい橙色 (5YR6/4)	良	良好	
4	土師質土器 甕 ② 21.0		橙色 (7.5YR7/6)	良好	良好	
5	陶器 插鉢 ① 33.4		素地-赤色(7.5R4/6) 釉-赤黒色(10R2/1)	良好	良好	
6	土師質土器 甕 ① 39.4		灰白色 (7.5YR8/2)	良好	良好	
暗渠 (Fig. 41)						
1	土師質土器 甕		灰褐色 (7.5YR5/2)	良好	良好	

吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

法量( )は復原値

No	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	焼成	備考
2	須恵器高坏	① 13.0 ② 8.8 ③ 7.1	明青灰色 (10BY7/1)	良好	良	
3	土師質土器火舎		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	良好	口縁部内外面に煤付着
4	土師質土器火舎		①淡橙色 (5YR8/4) ②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良好	良好	外底面に板目圧痕
5	土師質土器盤	① 21.8 ② (17.2) ③ 3.1	①浅黄橙色 (7.5YR8/3) ②灰白色 (10YR8/2)	良好	良好	
6	土師質土器盤	② (7.7)	にぶい橙色 (5YR7/3)	良好	良好	
7	施釉陶器鉢	① 22.4	素地—にぶい橙色 (2.5YR6/4) 釉—明赤褐色 (5YR3/3)	やや不良	やや不良	口禿
8	陶器播鉢	② 11.4	赤色 (10R4/6)	良好	やや不良	
9	陶器碗	① 11.0 ② 4.8 ③ 6.3	素地—灰白色 (N7/1) 釉—オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	良好	良好	
10	陶器碗	① (8.8) ② 3.6 ③ 6.3	素地—灰色 (7.5Y5/1) 釉—緑灰色 (5G6/1)	良好	良好	
11	磁器碗	① (9.0)	素地—灰白色 (10Y4/2) 釉—明緑灰色 (7.5GY8/1)	良好	良好	
14	土師質土器甕	① (72.4)	①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②橙色 (7.5YR7/6)	良好	良好	
4層 (Fig. 42)						
1	陶器壺	① (19.0)	にぶい橙色 (5YR7/3)	良好	良好	
5層 (Fig. 42)						
2	土師器碗	② (6.0)	①淡黄色 (2.5Y8/3) ②淡黄橙色 (10YR8/3)	精良	良好	
3	須恵器坏身	① (12.6)	青灰色 (10BY6/1)	不良	良好	
4	須恵器坏身	② (8.8)	青灰色 (10BY6/1)	やや不良	良好	
5	須恵器坏身	② (8.0)	青灰色 (5B6/1)	良好	良好	
6	須恵質土器坏	② (4.4)	①灰白色 (7.5Y7/1) ②灰色 (N4/0)	良好	良好	
7	施釉陶器鉢	① (28.4)	素地—にぶい橙色 (2.5YR6/4) 釉—明赤灰色 (5YR3/3)	良好	良好	
8	陶器碗	① (8.9)	素地—灰色 (7.5Y6/1) 釉—灰白色 (5GY8/1)	良好	良好	
9	土師質土器鼎脚		淡黄色 (5Y8/3)	良好	不良	
表採 (Fig. 42)						
10	須恵器坏蓋	① (8.8)	①暗青灰色 (10BG7/1) ②暗青灰色 (5PB4/1)	良好	良好	

( ) は現存値

No	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
落とし穴 (Fig. 22)							
2	剥片	(2.9)	2.5	1.05	4.2	黒曜石	
谷状遺構 (Fig. 25)							
13	磨製石斧	(4.5)	(3.95)	(1.95)	44.0	泥岩ホルンフェルス	頭部
14	砥石	4.7	4.4	3.8	108.9	角閃石安山岩質 結晶凝灰岩	
15	石鏃	1.85	1.5	0.85	0.6	石英片岩	
16	石鏃	1.65	1.5	0.55	0.8	黒曜石 (姫島産)	
17	石鏃	1.1	1.9	0.4	0.4	黒曜石	
18	石鏃	1.0	1.1	0.3	0.2	石英片岩	
19	加工痕のある剥片	2.7	1.2	0.65	1.4	黒曜石	
20	加工痕のある剥片	(2.7)	1.3	0.6	2.3	無斑晶安山岩	

弥生時代以降の遺構・遺物

( ) は現存値

No	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
21	加工痕のある剥片	2.15	1.4	0.65	1.2	石英片岩	
22	加工痕のある剥片	(1.9)	(1.9)	(0.5)	1.9	石英片岩	
23	加工痕のある剥片	8.0	1.8	0.4	0.3	石英片岩	
24	加工痕のある剥片	(2.85)	2.2	0.65	2.7	黒曜石	
25	使用痕のある剥片	4.1	2.3	0.9	4.9	黒曜石	
26	石 核	3.55	3.25	1.75	16.4	チャート?	
6層 (Fig. 28)							
1	石 鏃				0.6	黒曜石 (姫島産)	
2	石 匙	(3.55)	(2.25)	0.75	4.1	黒曜石 (姫島産)	横形
3	使用痕のある剥片	(3.75)	(2.65)	0.6	4.4	チャート	
4	磨 製 石 斧	(20.5)	(7.0)	(3.95)	682.7	緑泥石片岩	接合資料
5	石 核	3.60	2.45	1.60	8.9	黒曜石	
河川跡 (Fig. 32)							
9	打 製 石 斧	23.4	5.4	1.9	272.1	緑簾石石英片岩	
14	石 鏃	2.1	1.65	0.55	1.2	石英片岩	
15	石 鏃	1.65	1.6	0.35	0.5	石英片岩	
16	石 鏃	(2.25)	(2.0)	(0.45)	1.7	無斑晶安山岩	
17	加工痕のある剥片	(4.0)	2.35	0.7	5.5	黒曜石	
18	加工痕のある剥片	(2.65)	1.6	0.6	1.8	黒曜石 (姫島産)	
第3号溝 (Fig. 41)							
12	石 鏃	(1.25)	(1.55)	(0.4)	0.4	黒曜石	
5層 (Fig. 42)							
11	磨 製 石 斧	(7.6)	2.5	1.1	30.3	角閃石石英片岩	
12	打 製 石 斧	(11.5)	(6.3)	(1.2)	94.2	緑泥石石英片岩	
耕作土 (Fig. 42)							
13	打 製 石 斧	(10.95)	7.4	1.4	148.9	緑簾石石英片岩	

( ) は現存値

No	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材 質	備 考
第1号井戸 (Fig. 37)						
1	楕 円 形 曲 物	(9.5)	(9.4)	1.0		底板
2	棒 状 木 製 品	39.9	3.2	1.9		
3	籠 状 木 製 品	(9.2)	(1.8)	1.0		目釘穴
4	籠 状 木 製 品	(12.4)	(1.8)	1.0		

( ) は現存値

No	器 種	最大長 (cm)	最大径 (cm)	最小径 (cm)	備 考
暗渠 (Fig. 41)					
13	煙 管	5.2	0.9	0.25	吸口

2～9・11・12は5層出土。2は土師器壙。糸切り底で内面ヘラミガキ。3～5は須恵器の坏身。3は直線的に開く口縁部をもち、端部は丸い。4・5は高台をもたない底部。6は須恵質土器の坏身底部。外面には墨書がみられるが、判読できない。7・8は陶器。7は備前系の播鉢。わずかに内傾する口縁部をもち、端部外面には断面三角形の突帯を貼付し、肥厚させる。8は肥前系の壙で、口縁部は直線的に立ち上がる。絵付はみられない。9は土師質土器の鼎脚部。11は小形の磨製石斧で、刃部幅が頭部幅よりやや広い。頭部に敲打痕が認められる。断面形は楕円形。12は打製石斧。正裏両面に成形時の荒い剝離痕が残るが、正面の左右両側縁の二次加工は比較的丁寧である。刃部は尖る。他に5層からは寛永通宝1枚 (Fig. 43-3) がある。

その他の遺物 (Fig. 42-10・13, PL. 22・24)

10は須恵器の坏蓋で、出土状況不明。体部から口縁部には直線的に移行する。かえりは短く、口縁部以下にわずかに突出する。13は第2層 (耕作土) から出土した打製石斧。扁平な板石を素材とし、正裏両面中央部の素材面と自然面との区別は困難である。正裏両面の左側縁、下縁の二次加工は比較的丁寧である。刃部はあまり尖らず、やや面をもつ。各剝離面には階段状の剝離痕がめだつ。

#### 4 小 結

##### (1) 遺構と遺物について

##### 1) 縄文時代

縄文時代の遺構には河川跡、落し穴、溝がある。県内では縄文時代の遺跡の調査そのものの調査例が少なく、しかも沿岸部に集中しており、その実態は必ずしも明らかではない。また、遺構は早期に遡る可能性のある<sup>6)</sup> 堅穴住居状の遺構のほか土<sup>7)</sup> 壙、河川跡、<sup>8)</sup> ドングリ等の<sup>9)</sup> アク抜き用の貯蔵穴などが検出されているにすぎず、貴重な検出例となった。

河川跡は幅約29m以上の規模をもち、蛇行しながら北東から南西に走行する。遺構の性格からやや時期幅をもつ遺物が含まれていることも考えられるが、河川跡の上位に堆積する第6層から口縁部下および胴部の屈曲部に突帯状の肥厚帯をもち、口縁部から頸部の内<sup>10)</sup> 外面にやや規則的な横条痕を施す大形の粗製深鉢が出土している。岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ<sup>11)</sup> 式に相当し、晩期中頃に位置づけられるが、肥厚帯には刻み目をもたず、突帯文出現の前段階のものと考えられ、晩期中頃でも新しい要素をもつものである。河川跡の遺物には口縁部内面に段をもつものや、口縁端部が丸く、内面を横ナデによってにぶく段状に作り出す波状口縁の粗製浅鉢が含まれており、岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式に相当するものであろう。

層序的にも6層の土器より遡るものであるが、器形、調整のわかる資料がきわめて少なく、県内での編年が充分行われていない現状では大きく晩期中頃の時期を与えておきたい。

吉田構内では縄文時代の遺構は二箇所<sup>12)</sup>で検出されている。いずれも晩期のものである。遺跡保存地区の西方では、今回検出した河川跡と直交する幅約60mの河川跡1条が確認されているが、距離的にやや離れており、相関関係は明かでない。また、養護学校敷地では晩期中頃の土壙1基が確認されている。

山口盆地では本学の南西約1～1.5kmに所在する西遺跡<sup>13)</sup>で埋甕、河川跡、小路遺跡<sup>14)</sup>で土壙、溝状遺構<sup>15)</sup>、また、榎野川右岸では木崎遺跡<sup>16)</sup>で土壙の報告例がある。時期的には晩期中頃(岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式)から終末(岩田Ⅴ類・月崎上層Ⅳ式)<sup>17)</sup>のもので、それ以前の遺構は検出されていない。松尾征二氏は小路遺跡周辺の段丘および段丘堆積物の分析から、小路層下部と命名したこれらの遺構を掘り込む層にアカホヤ火山灰に由来する、淡褐色を呈するバブル型の平板状やXY状の火山ガラスがかなり含まれていることを明らかにした<sup>18)</sup>。同層は本学構内では晩期中頃でも新しい要素をもつ遺物を包含することから、小路層下部は二次堆積物で、その堆積時期は縄文時代前期から晩期中頃にあたる。したがって、盆地内では、従来、弥生時代以降の検出面とされていた同層から検出される縄文時代の遺構は、上記の遺跡にみられるように、遡っても晩期中頃までであろう。なお、河川跡は同層の堆積過程で、一時期地表面であった段階に機能していたもの理解できる<sup>19)</sup>。

次に、調査区のほぼ中央部で検出面された小土壙について述べておきたい。土壙は晩期中頃の河川跡の右岸に位置し、土壙端と川岸の距離は約70cmときわめて近接して掘り込まれている。平面形態は隅丸長方形で、長軸105cm、短軸78cm、深さ25cmの規模をもち、長軸は河川跡と直交している。底面には深さ58cmの円形のピットがあり、板石状の自然石が縦位に詰められている。

吉田構内では他に、今回の検出地点の北東約270mに位置する大学会館敷地<sup>20)</sup>で、ほぼ同じ平面形態、規模、構造をもつ土壙の検出例(SK2・3)がある。SK2は長軸114cm、短軸70cm、深さ38cmの規模をもち、SK3は暗渠に切られているため平面の規模は明かでないが、深さは34cmである。2基の土壙は長軸方向を同じくし、約5m間隔で並列しており、いずれもピット内への詰め石はない。幅約16m以上の谷の谷頭付近に立地し、報告の段階では谷の緩斜面から出土した遺物から、埋没の時期を少なくとも古墳時代前期としたが、その下位にはまだ厚さ約80cmの堆積層が存在すること、谷の埋積土内から縄文早期のものと思われる石鏃が出土していることから、谷の開いていた時期は縄文時代に遡る可

能性がある。先に記した小路遺跡でも類例が認められる。第71号土壙がそれで、長軸119cm、短軸62cm、深さ10cmの規模をもち、縄文時代晩期のもと考えられている。

以上のように、縄文時代に属すると考えられる底面にピットをもつ小土壙は県内で4例ある。同じ構造をもつ土壙の検出例は東日本で多く、近隣では鳥取県青木遺跡<sup>21)</sup>、岡山県谷尻遺跡<sup>22)</sup>、福岡県下原遺跡<sup>23)</sup>、門田遺跡<sup>24)</sup>、佐賀県六本黒木遺跡<sup>25)</sup>などで報告例があり、落とし穴と考えられている。県内の4例もこれに当たると思われるが、解消すべき問題点がある。

まず、第一に深さがあまりないこと、すなわち構造上の問題点である。SK2・3および第71号土壙が、後世の削平のよって上面を大きく削られていること、教養部の例が小路層下部の堆積過程で浸食、人為的な地表の改変を受けたことが考えられることから、4基の土壙の深さは掘削の時点での深さを示すものではない。むしろ平面の形態・規模、構造の顕著な類似性、つまり構造上の規格性が強調されるべきであろう。

第二に落とし穴として機能する環境にあったかどうか、すなわち立地上の問題点である。教養部の例が河川跡、SK2・3が谷のすぐそばに存在することは、必ずしも偶然の所産とは考えられず、水呑場あるいはヌタ場を求めて集まる小動物捕獲のために、意識的に選択された場所であったものと思われる。また、県内の4例は落とし穴の周辺を広範囲に調査したものではなく、1基のみの検出例が単独では存在しない落とし穴の否定材料とはならない。その意味からも、SK2・3の並列状況はまさに落とし穴としての機能をもつものである。

なお、遺構ではないが、調査区中央部では「U」字形に、南西および南東に開く浅い谷状の落ち込みを検出した。出土遺物は須恵器、土師器を若干含むが、大半が岩田V類・月崎上層IV式に対比される突帯文土器を中心とする晩期終末のものである。縄文時代晩期終末の一時期に谷状の落ち込みが埋積し、埋まりきらなかった窪みに古墳時代の遺物が混入したものと考えられる。

また、今回の調査の成果として特筆すべきは晩期の遺物包含層を確認したことであろう。本学構内にとどまらず、県内でのこの時期の遺物は、遺構に伴うものを含めても多くはなく、編年上の課題となっているとともに縄文社会の復元に大きな障害となっている。これを機に、今後、沖積低地での晩期さらにはそれを遡る遺物包含層、遺構の検出例が増加するものと思われる。

## 2) 弥生時代から江戸時代

弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居跡4基、古墳時代の河川跡、江戸時代の井戸2基、

埋甕土壙3基、掘立柱建物跡2棟のほか、土壙13基、溝2条、柱穴多数がある。

竪穴住居跡は4基検出した。後世の削平によって壁面は最も残りのよい第3号竪穴住居跡でも5cmを残すに過ぎない。第4号竪穴住居跡は二重に巡る壁溝をもち、建て替えが想定される。規模はいずれも小さく、主柱配置は明かでない。出土遺物はないが、埋土の色調、榎野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から、第2号竪穴住居跡が弥生時代中期から後期、第3・4号竪穴住居跡が弥生時代後期から古墳時代、第1号竪穴住居跡が古墳時代のものと考えられる。4基とも遺跡保存地区の竪穴住居跡と同時期で、弥生時代中期から古墳時代にかけて、吉田構内南西部から中央部付近に大規模な集落が存在していたことを窺わせる。近年、遺跡保存地区における集落の内容が次第に明かになっており、吉田構内での集落の時期的な立地、展開過程を解明する貴重な資料となった。

河川跡は古墳時代のものを2条検出した。このうち第1号河川跡は、幅約2mの規模をもち、北東—南西に走行する。第2号河川跡と同一のものかもしれないが、調査区外にあたるため確認していない。出土遺物、埋積土の状況から、5～6世紀代の少なくとも2時期の流路が存在する。この時期の河川跡は今回の調査地域の南約130mに位置する教育学部実験実習棟敷地<sup>26)</sup>、北東約150mに位置する図書館増築地<sup>27)</sup>でそれぞれ1条が検出されているが、これらとは流路方向が異なり、集落立地、規模を考えるうえで注目されよう。

近世の集落関連遺構には掘立柱建物跡、井戸、埋甕土壙がある。

掘立柱建物跡は身舎1間×3間(第1号掘立柱建物跡)、1間×2間(第2号掘立柱建物跡)のもの2棟がある。いずれも規模は小さい。他にも同時期のものと思われる柱穴が調査区内ほぼ全面に存在するが、復原できなかった。出土遺物はなく、時期比定は困難であるが、検出面の上位に堆積する5層から17世紀代の遺物が出土していること、両建物のそれぞれに近接して、この時期の井戸が存在することから17世紀前半のものと考えられる。2基の井戸はいずれも素掘りと思われるが、第1号井戸の底面には自然石が散乱しており、廃絶時に石組みが抜かれた可能性がある。埋甕土壙は少なくとも2基並列しており、土壙は共有しない。両建物は棟方向がほぼ直交し、井戸、埋甕土壙を付設する屋敷内の一連の建物として集落を構成していたものと考えられる。吉田構内では、中世以降の集落は環濠内に井戸をもつ室町時代の建物跡が知られているが、近世の建物跡の検出例は少なく、中世から近世にかけての屋敷構造、集落および構成員の性格を知る上で興味深い。

遺物として着目しておきたいものに、まず、第1号河川跡から出土した須恵器模倣土師器がある。吉田構内では、図書館増築地で出土した7世紀初頭の坏蓋について2例目であり、製作工人集団の性格、動態を知るうえでの基礎的な資料である。また、墨書のある須恵質土器は小破片のため明確な時期、墨書の判読はできないが、筆跡、字形から遡っても鎌倉時代以降のものであるという。<sup>29)</sup>この時期、吉田構内周辺地域は「恒富保」の一部に編入されており、<sup>30)</sup>鎌倉幕府から地頭職として任官した父平子重経から「恒富保」を分割相続した四男重継は恒富氏と称している。13世紀には恒富氏は本家の恒富氏と分家の吉田氏の両家に分かれ、地頭領主として成長したが、両家の居館跡は現在のところ明かでなく、物的資料も乏しい。しかし、本構内では今回の調査地点の北東約270mに位置する大学会館敷地で、12～13世紀の畿内系瓦器に加え、在地の一般集落を卓越する量の輸入陶磁器が出土しており、<sup>31)</sup>今回の文字資料とあわせて居館関連施設の存在を傍証するものとして注目される。また、第1～3号埋甕土壙の土師質土器の甕は、口縁部の形状から時期的にやや古い要素をもつが、第2号井戸出土のもの、大学会館前庭部敷地のDトレンチ4・5号土壙<sup>32)</sup>出土品に類例が認められる。口縁部の形状、胴部から頸部にかけての内外面のタキによる調整など強い規格性を持ち、山口県防府市に所在する佐野焼の系統と考えられる。<sup>34)</sup>

## (2) 埋蔵文化財の遺存状況と今後の方針

埋蔵文化財資料館運営委員会は調査終了後、埋蔵文化財資料館から調査結果の報告を受け、現地の視察を行うと共に、その後の取り扱いについて協議した。

同委員会は竪穴住居跡をはじめとして、新営予定地内における弥生時代以降の遺構が、後世の削平によって遺存度がよくないこと、遺構の分布密度も遺跡保存地区などとくらべて希薄であること、また、計画建物の候補地を他に求めることが困難であることなどから、調査結果を記録保存することで合意した。

しかし、縄文時代の遺物包含層が弥生時代以降の遺構の検出面であることが確認され、同じ色調、組成をもつ堆積層が吉田構内ではかなり広範囲に検出されること、また、吉田構内ではこれまでほとんど検出されていない縄文時代の遺構が存在し、しかも、弥生時代以降の遺構の検出面より下位の堆積層に掘り込まれている点を重視し、今後、縄文時代の集落関連遺構の精査が必要であると結論づけた。



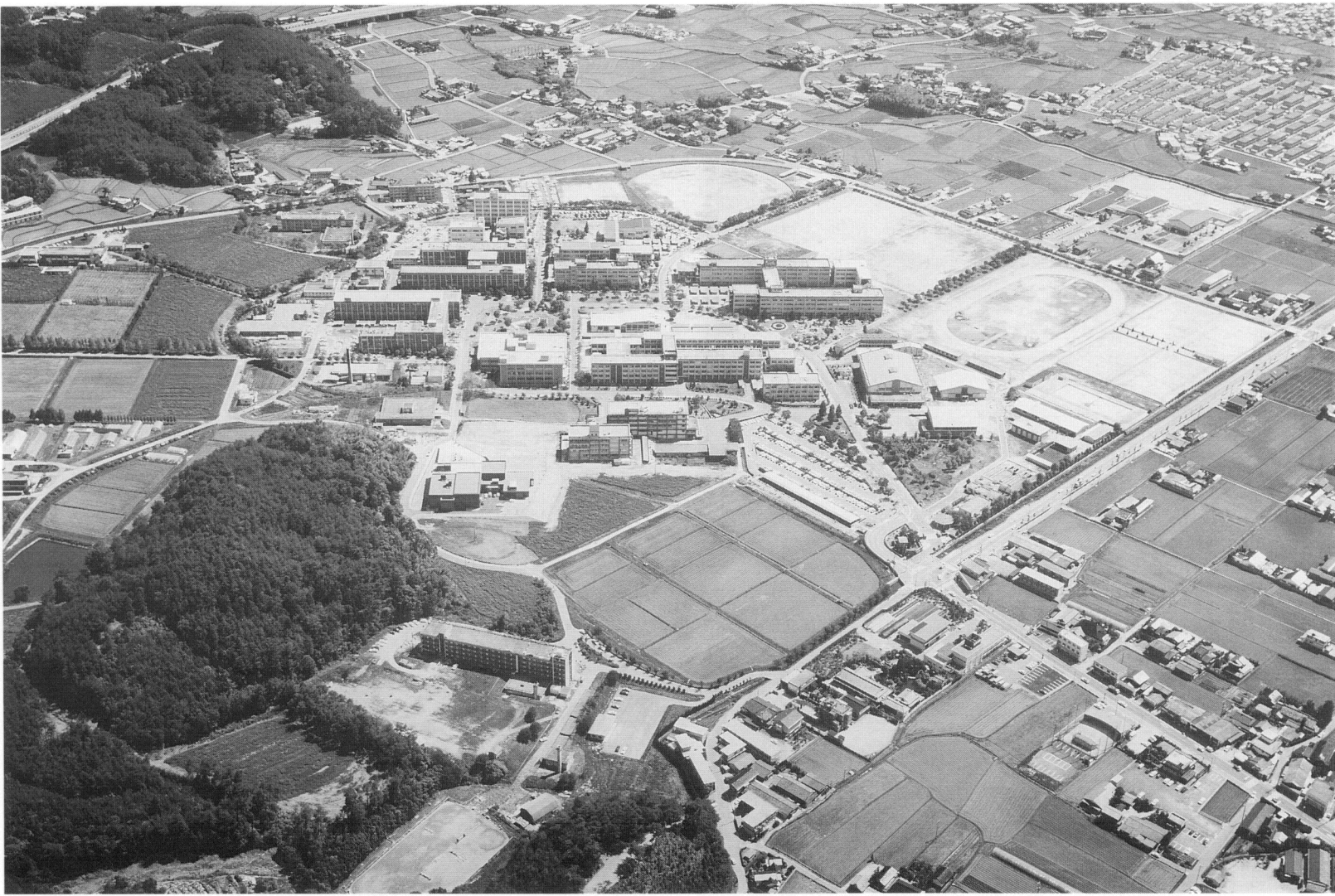
注

[注]

- 1) a 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 V』、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1986年）。
- b 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 VI』、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1987年）。
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料資料館「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 II』、1985）。
- 3) 湖見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」（『広島大学文学部紀要』第18号、広島大学文学部、1960年）。
- 4) 湖見浩「月崎遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。
- 5) a 前掲注 1) aに同じ。
- b 河村吉行「古墳時代における竪穴住居の各属性について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 VI』、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1987年）。以下、竪穴住居跡の平面形態、規模による時期決定は上記の文献による。
- 6) 1988年に山口県田石器文化研究会の調査によって、宇部市長樹遺跡第二地点で検出されている。
- 7) a 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「木崎遺跡」（『朝田墳墓群・木崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第32集、1976年）。
- b 山口県教育委員会・山陽工業株式会社「奥正権寺遺跡」（『奥正権寺遺跡 I』、山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年）など。
- 8) a 山口市教育委員会『小路遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第27集、1988年）。
- b 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）など。
- 9) 平生町教育委員会『岩田遺跡』（1974年）。
- 10) 前掲注 3) に同じ。
- 11) 前掲注 4) に同じ。
- 12) 前掲注 8) bに同じ。
- 13) 山口市教育委員会『西遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年）。
- 14) 前掲注 8) aに同じ。
- 15) 前掲注 7) aに同じ。
- 16) 前掲注 3) に同じ。
- 17) 前掲注 4) に同じ。
- 18) 松尾征二「小路遺跡周辺の第四系」（『小路遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）。
- 19) 今回の調査ではB-C壁およびC-D壁の一部を深掘し、土壌サンプルを採取している。現在、火山灰の同定作業を進めており、分析終了後に報告する予定である。
- 20) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 III』、1985年）。
- 21) a 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書 I』（1976年）。
- b 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書 II』（1977年）。
- c 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書 III』（1978年）。
- 22) 岡山県文化財保護協会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』（1976年）。
- 23) 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』（1978年）。
- 24) 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告2』（1983年）。
- 25) 西田和己・岩長政博「六本黒木遺跡」（『大門西遺跡』、佐賀県文化財調査報告書第51集、1980年）。
- 26) 山口大学埋蔵文化財資料資料館「教育学部構内」-19・20区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 I』、1982年）。
- 27) 前掲注 2) に同じ。
- 28) 山口大学埋蔵文化財資料資料館「昭和54・55年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 I』、1982年）。

吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

- 29) 教養部教授木村忠夫先生に御教示を得た。
- 30) 内田伸・石川卓美「山口市」(『山口県の地名』、日本歴史地名体系、1980年)。平清水八幡宮の徳治3年(1308年)の神主職譲状、廃寺高蔵寺の応永21年(1414年)の鐘銘から吉田の地が恒富保の一部であったことが推定されている。
- 31) 『三浦家文書』に建久8年(1197年)、平子重経が恒富保の地頭職に任ぜられた記載がある。
- 32) 前掲注 20) に同じ。
- 33) 前掲注 1) a) に同じ。
- 34) 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書―窯業―』(山口県埋蔵文化財調査報告書第74集、1983年)。



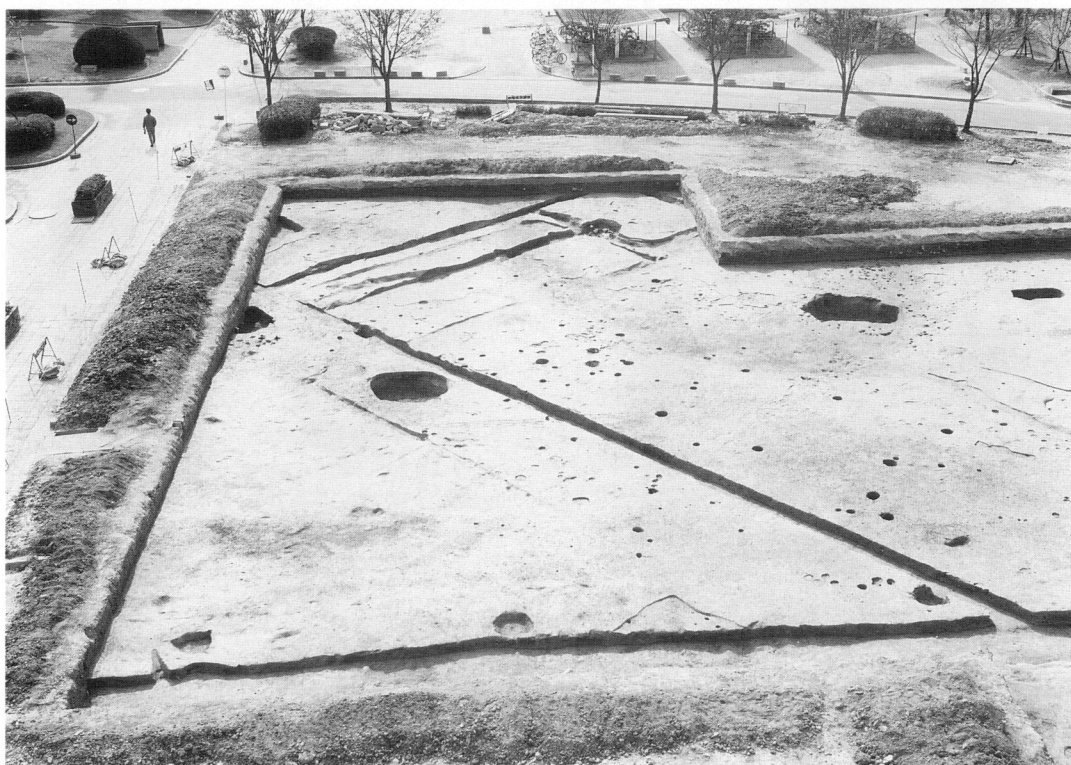
吉田構内全景 (北西から)

PL. 6

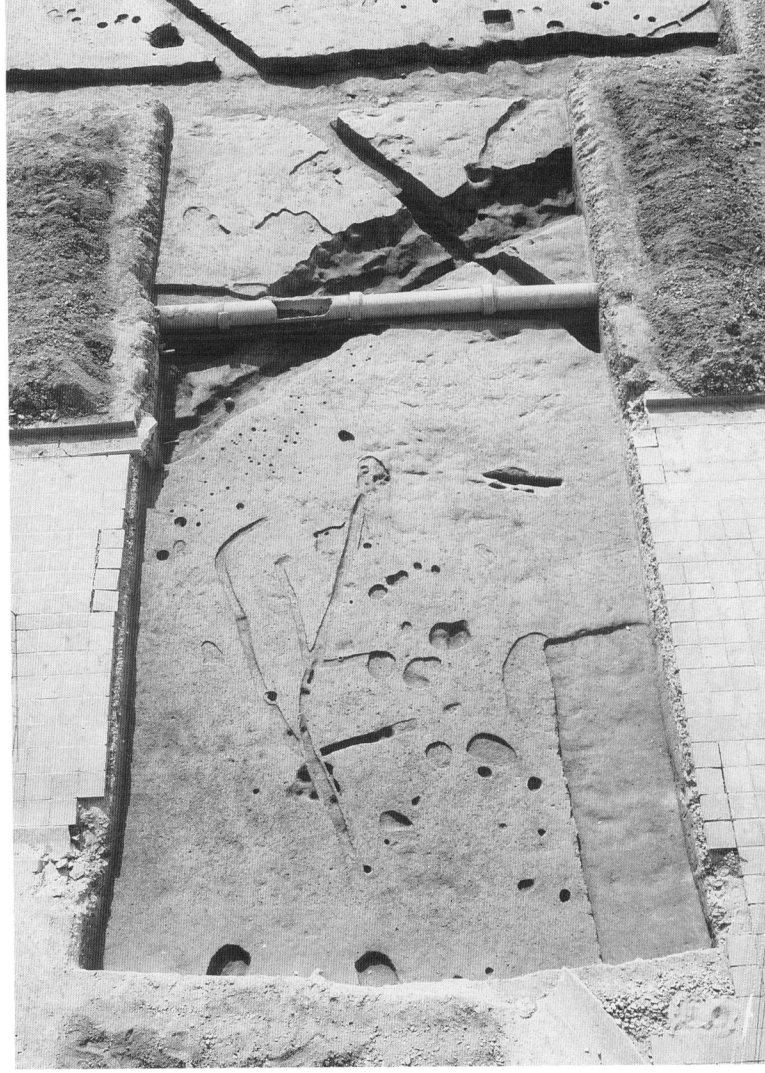
吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査(1)



(1) 調査区西半部(北から)



(2) 調査区東半部(北から)

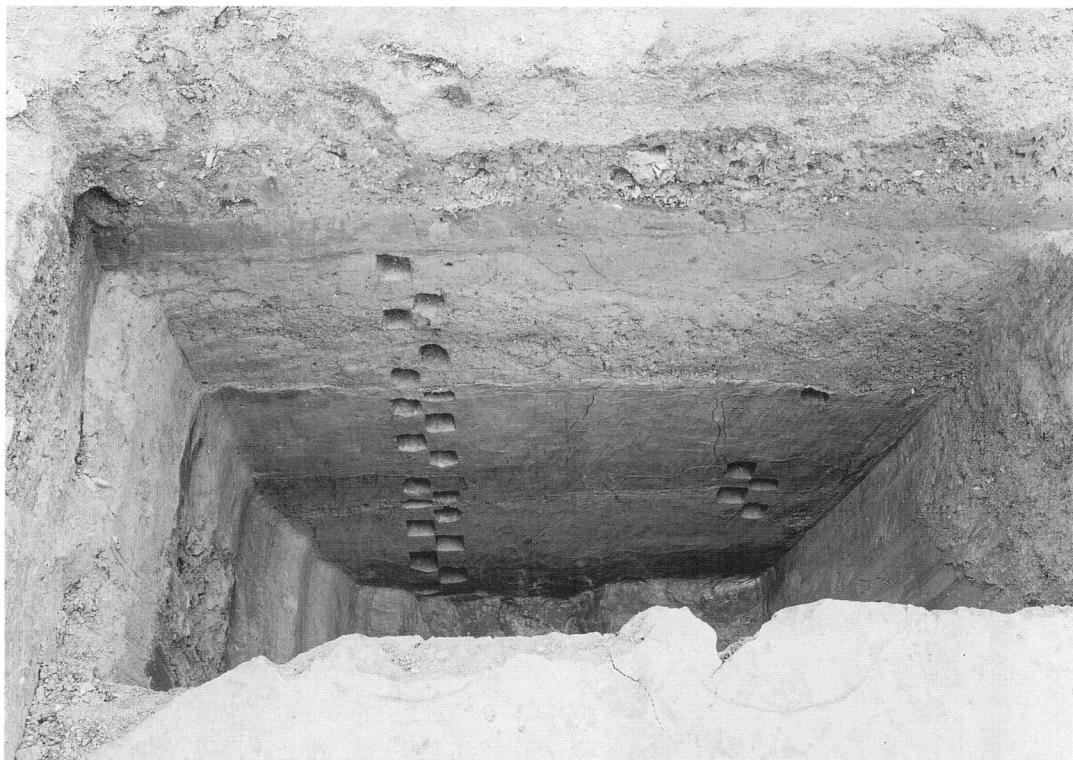


(1) 調査区北端部(北から)

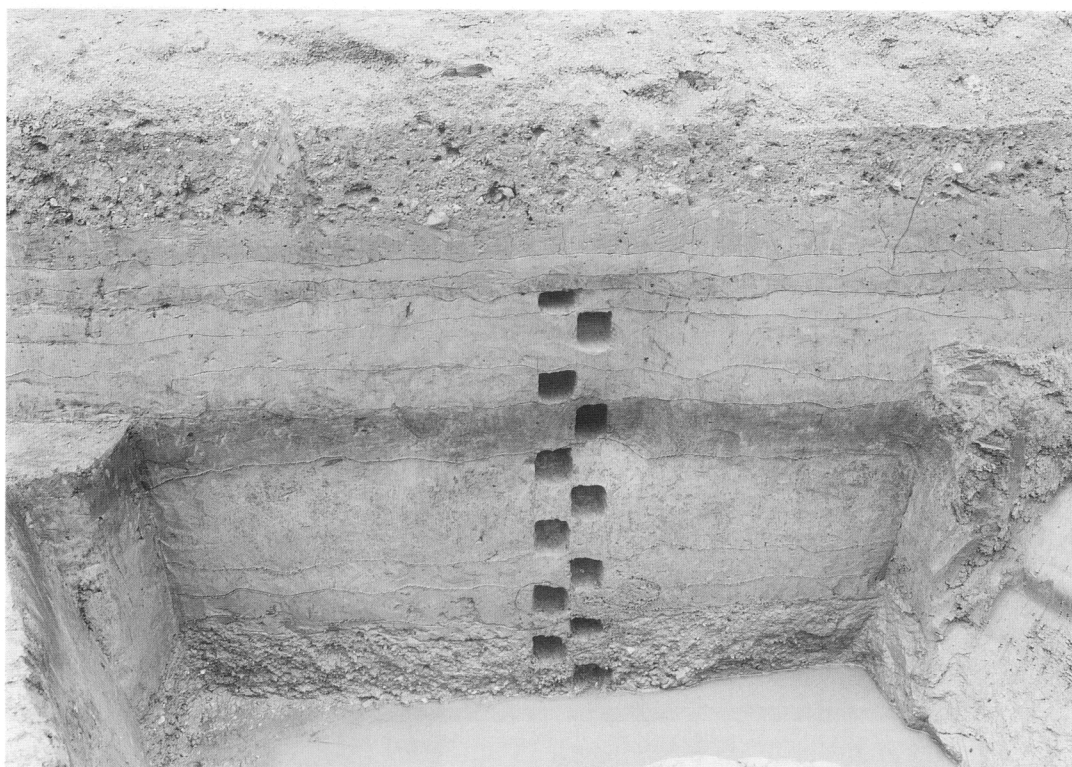


(2) Aトレンチ河川跡(西から)

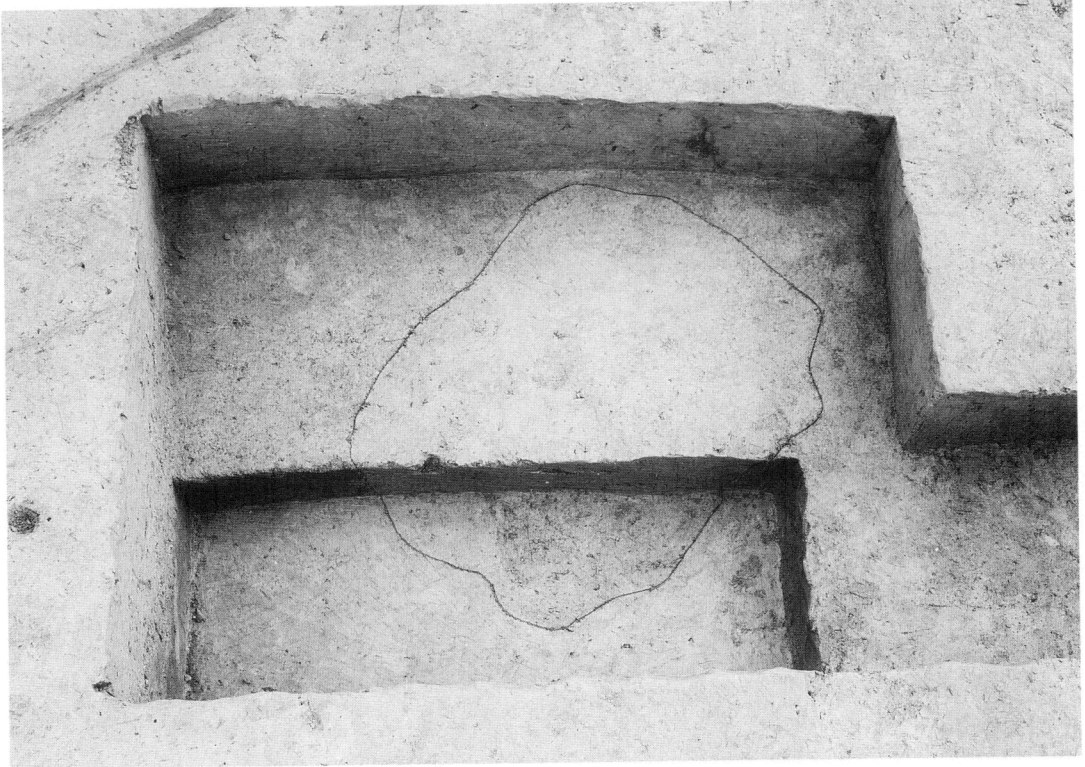
吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査(3)



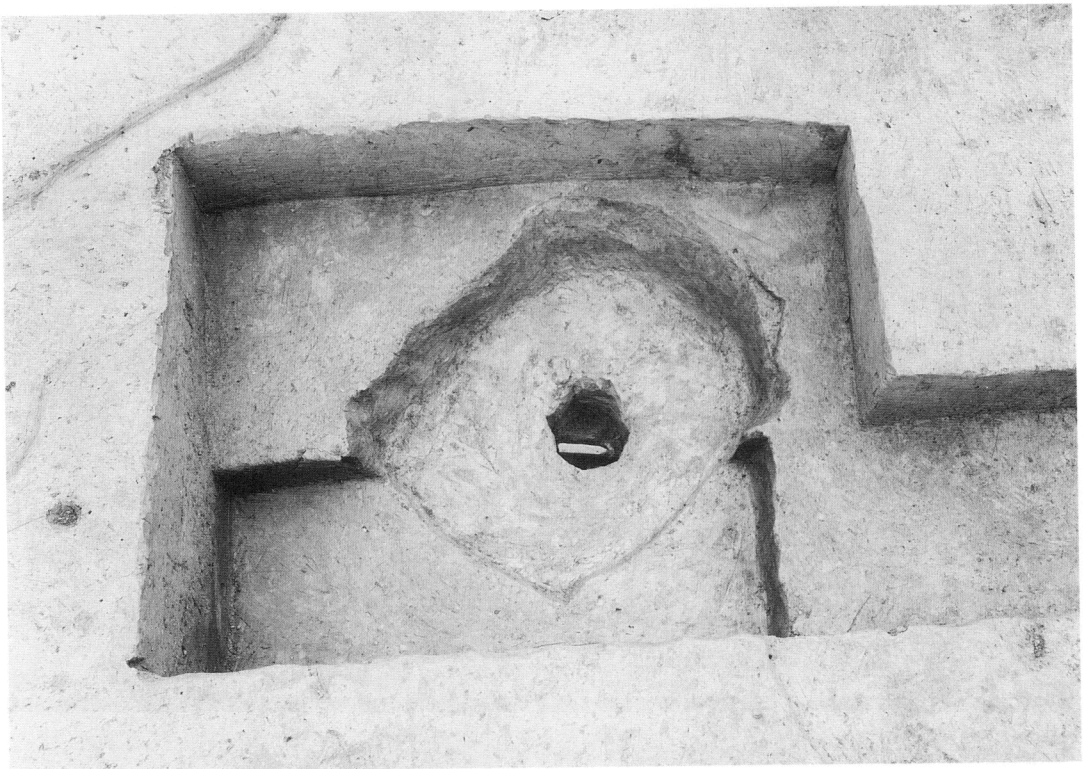
(1) A-B壁土層断面(東から)



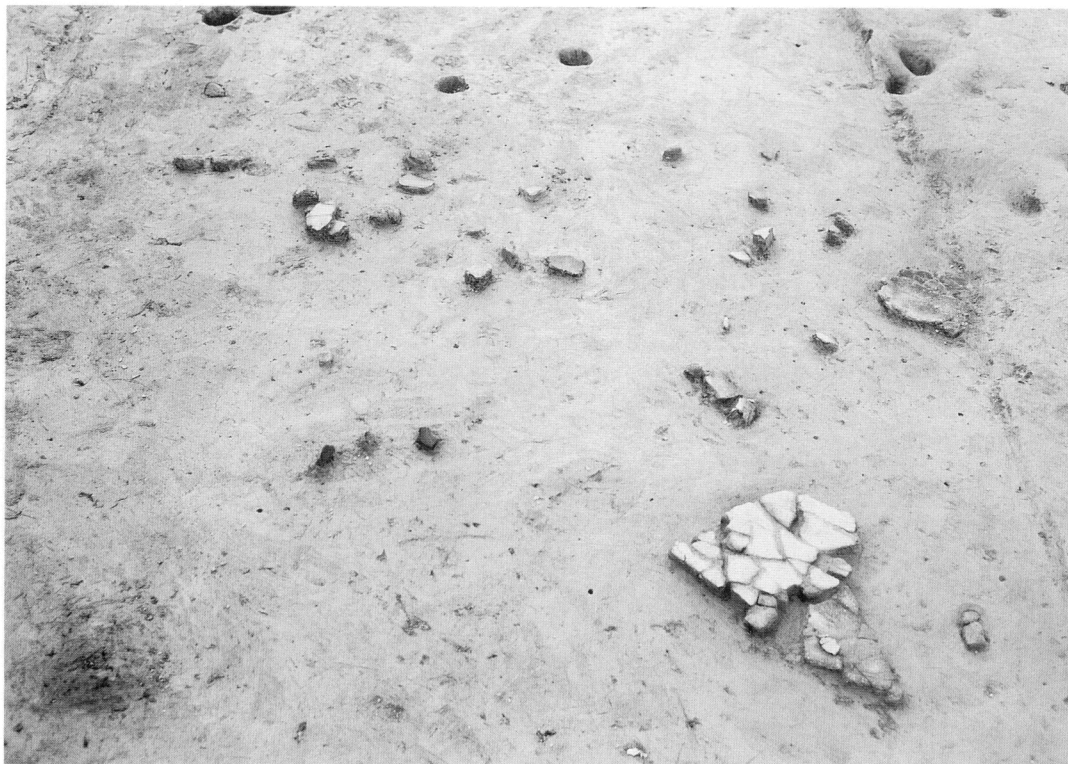
(2) C-D壁土層断面(北から)



(1) 落とし穴検出状況(西から)



(2) 落とし穴全景(西から)



(1) Aトレンチ遺物出土状況(東から)



(2) Aトレンチ遺物出土状況(東から)

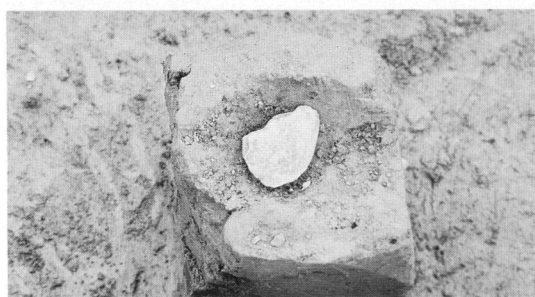




(1) Bトレンチ全景(北から)



(2) Cトレンチ全景(西から)



(3) Aトレンチ石斧出土状況(北から)



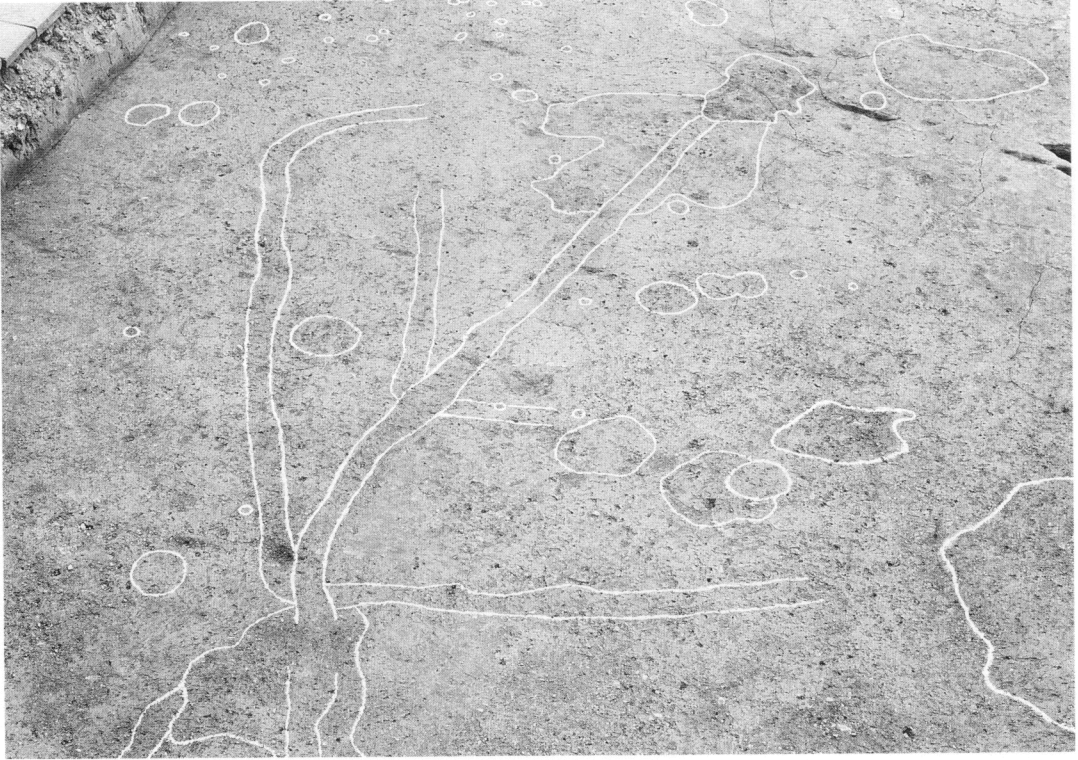
(4) 包含層石匙出土状況



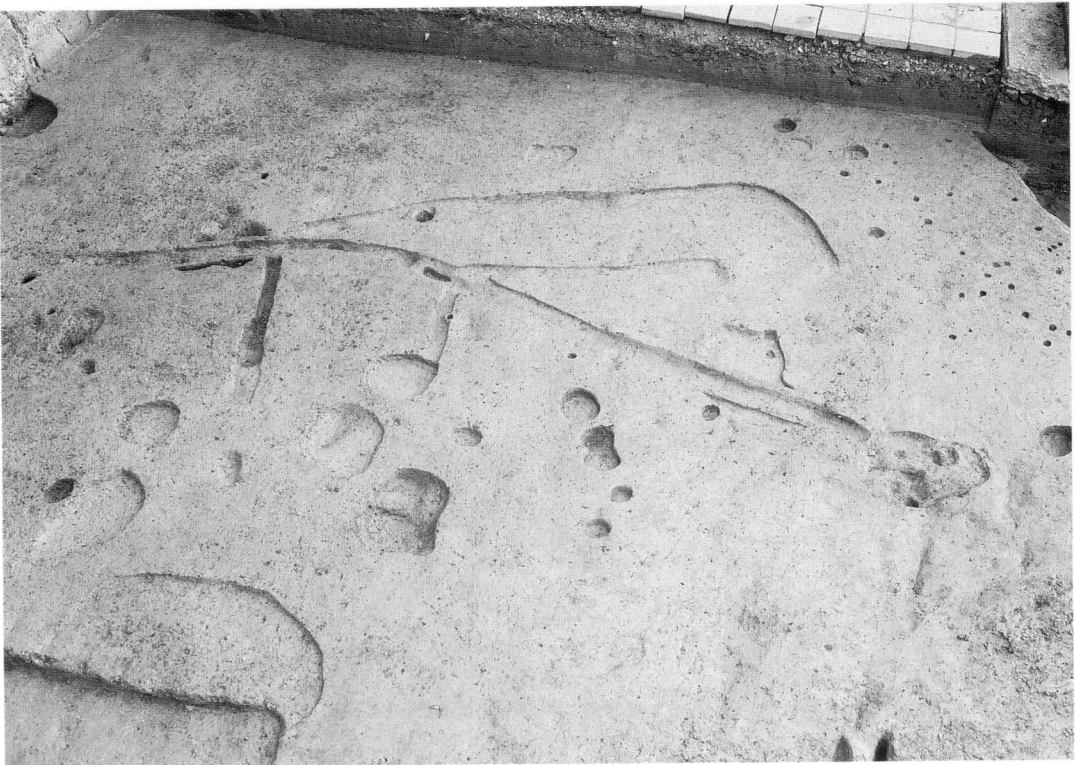
(1) 第1～3号竪穴住居跡検出状況(北西から)



(2) 第1・3号竪穴住居跡(西から)



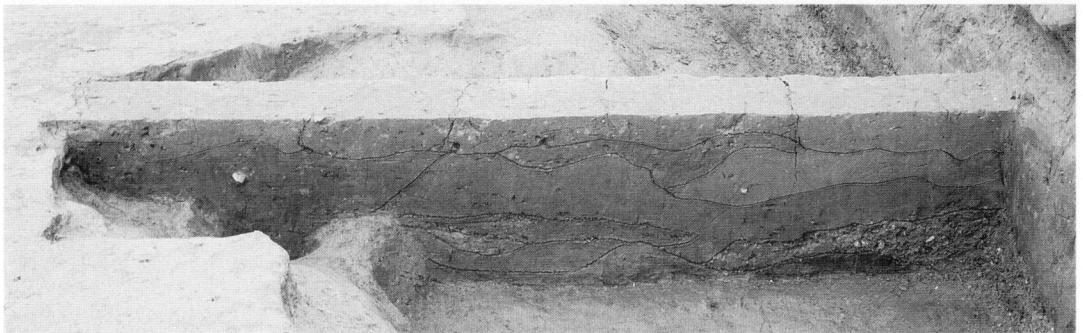
(1) 第4号竪穴住居跡検出状況(北から)



(2) 第4号竪穴住居跡(西から)



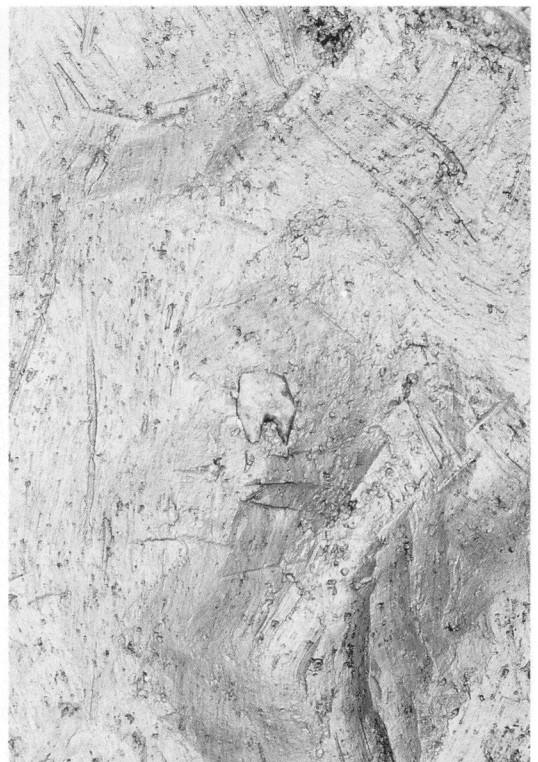
(1) 第1号河川跡土層断面(東から)



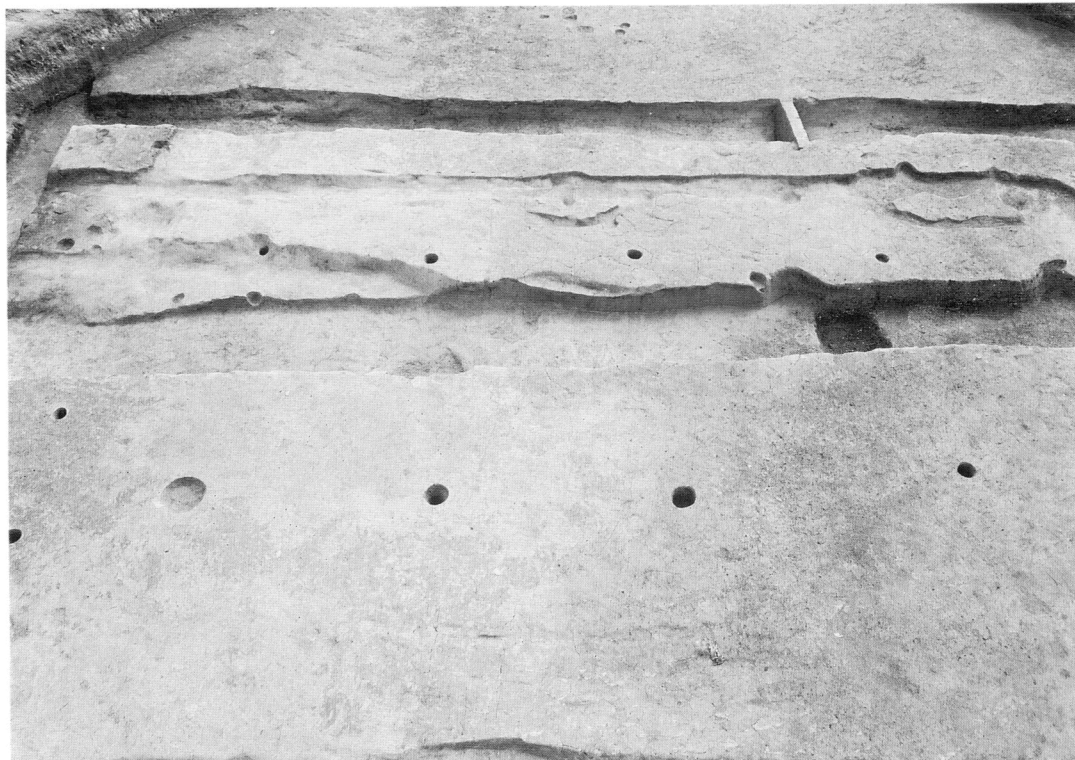
(2) 第2号河川跡土層断面(北から)



(3) 第1号河川跡石斧出土状況(南西から)



(4) 第2号河川跡石鎌出土状況(南から)



(1) 第1号掘立柱建物跡(北から)



(2) 第2号掘立柱建物跡(西から)

吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査(1)



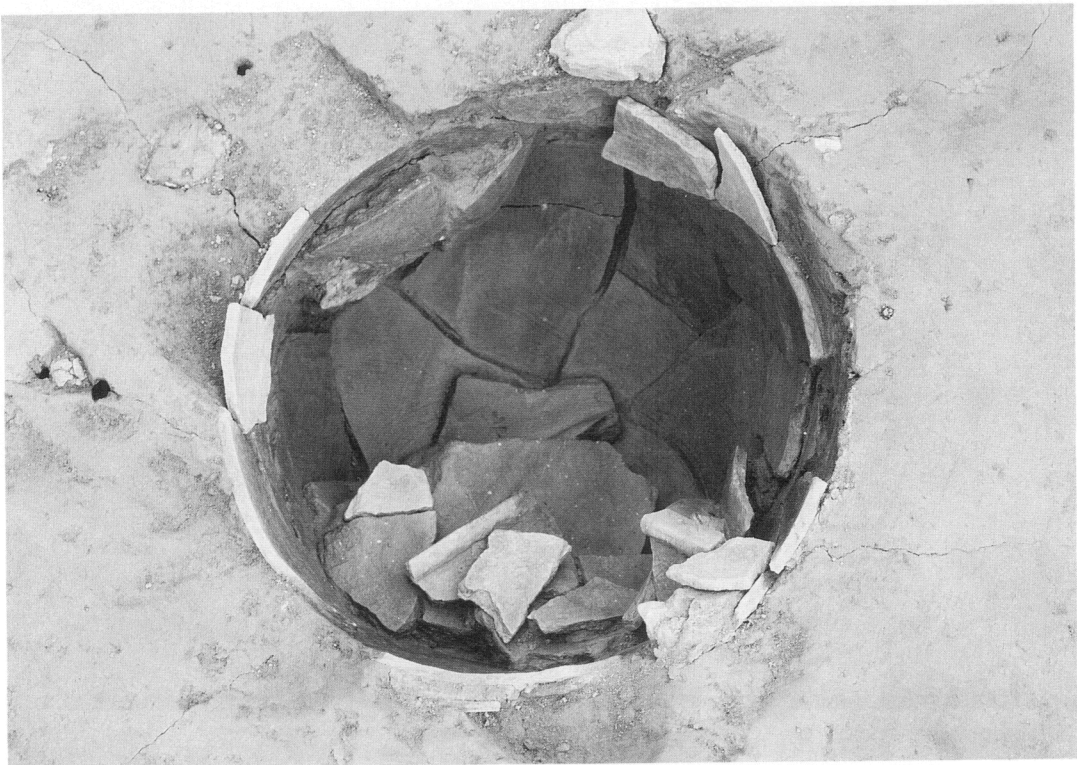
(1) 第1号井戸(東から)



(2) 第2号井戸(東から)



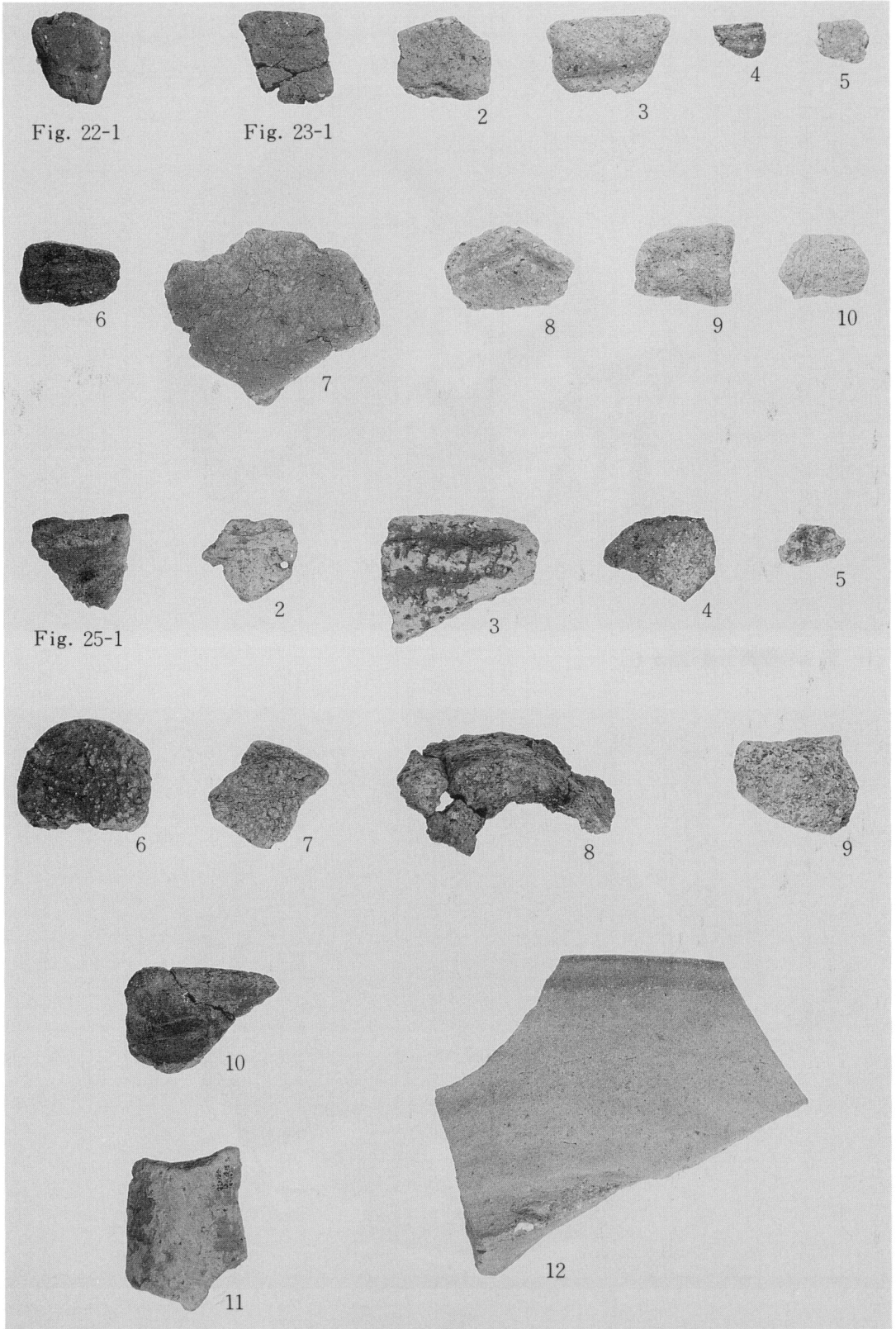
(1) 第2号埋壙土壙(西から)



(2) 第3号埋壙土壙(西から)

PL. 18

吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査(13)



出土遺物(1)



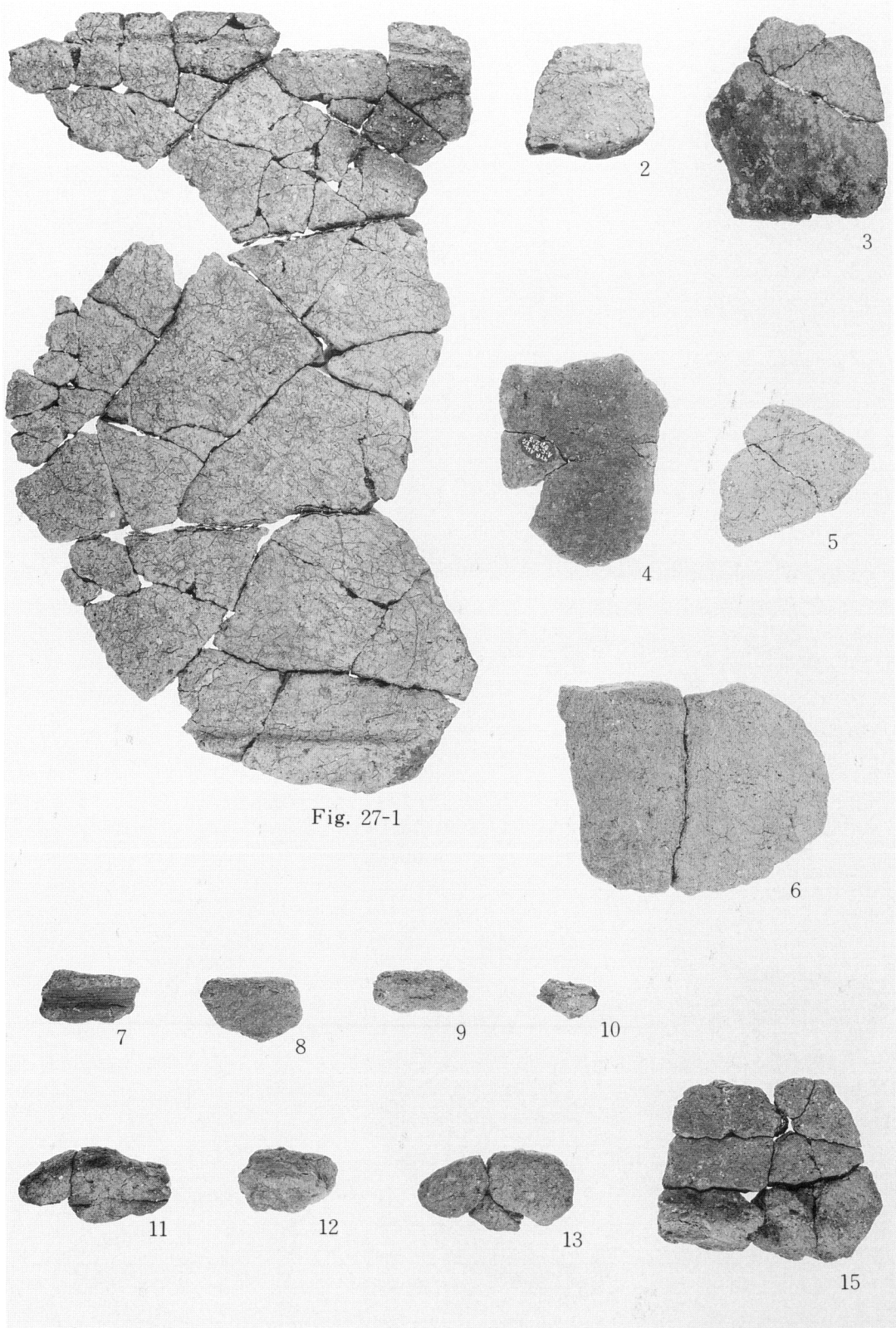


Fig. 27-1

吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査(15)

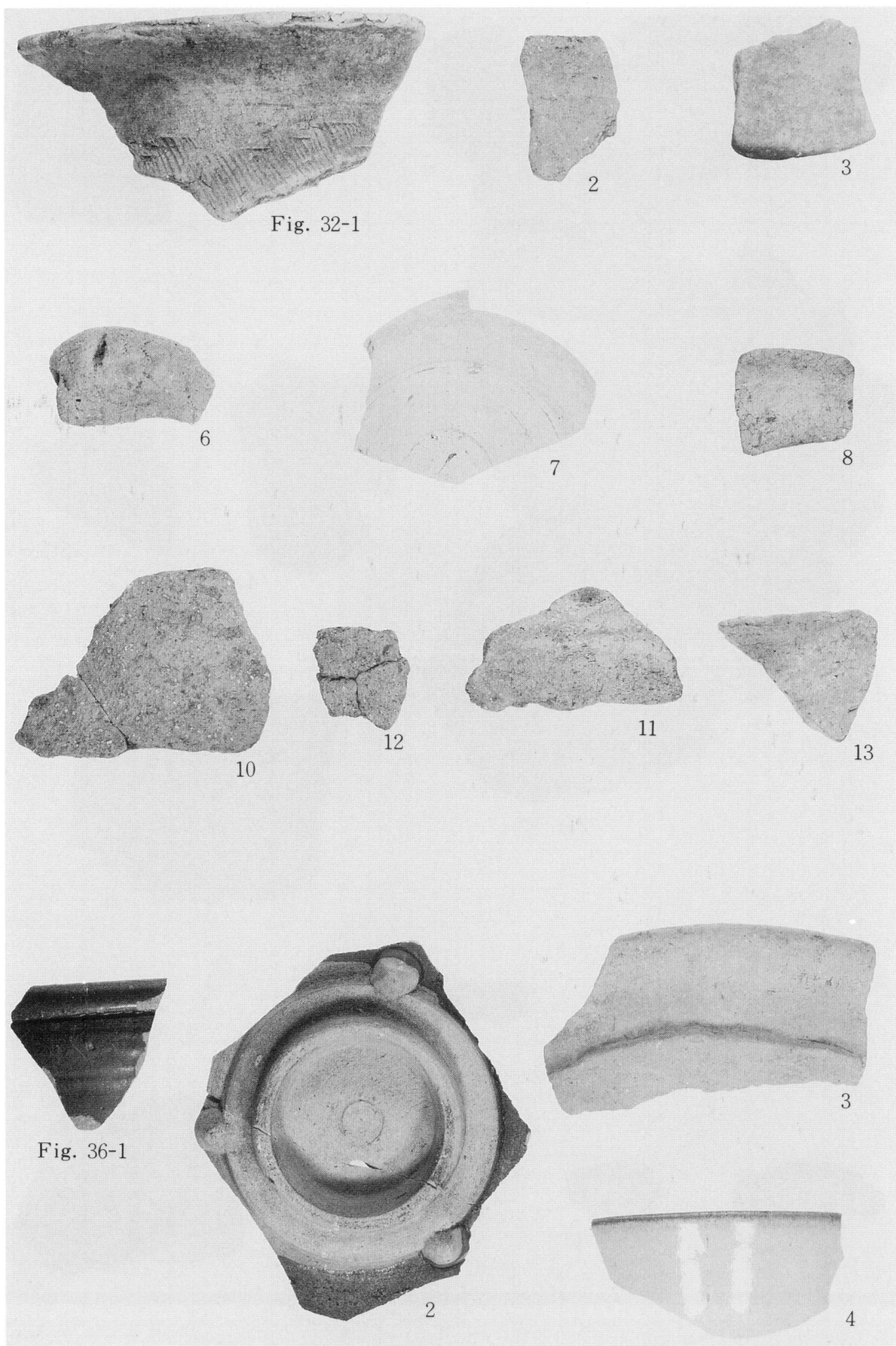
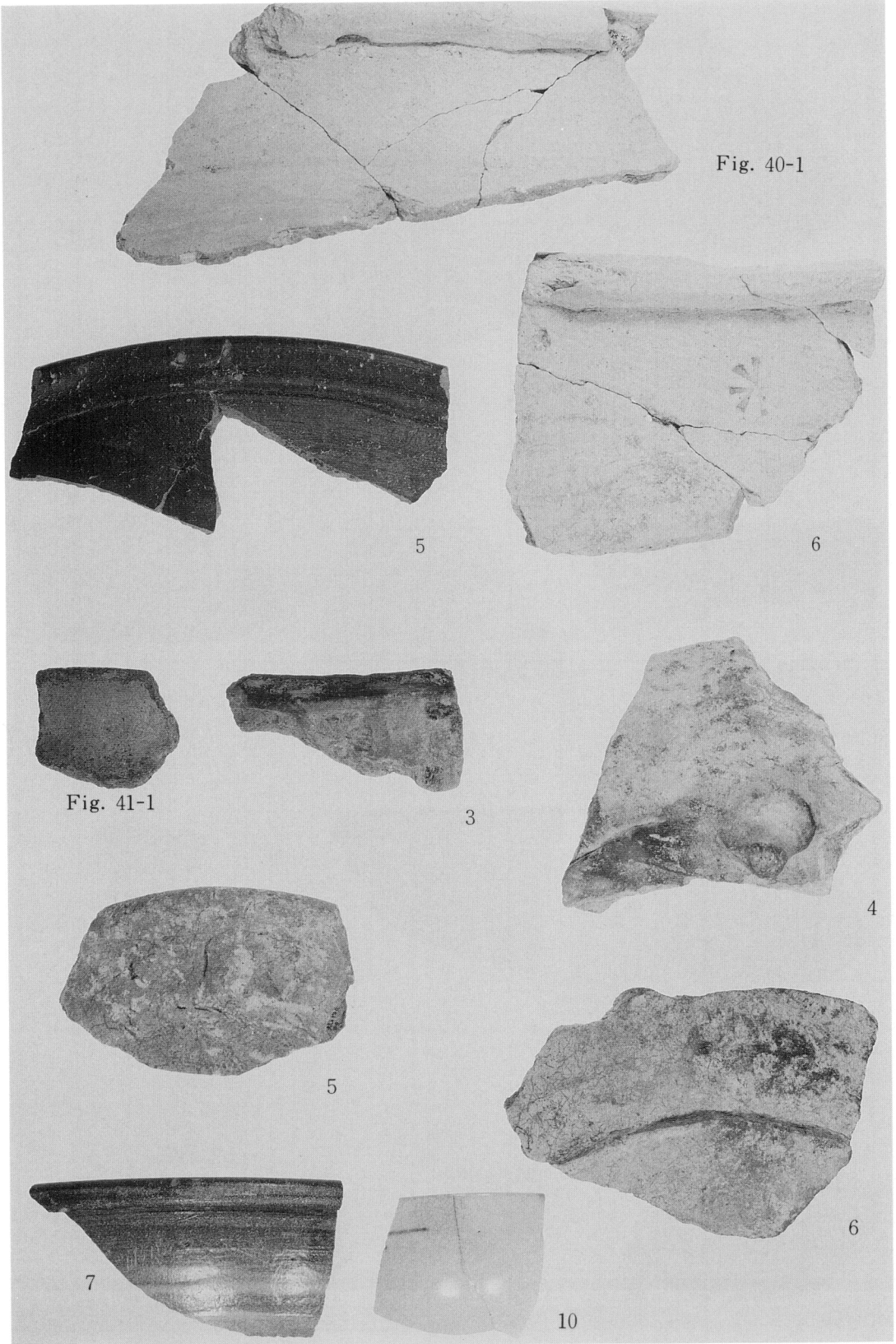


Fig. 32-1

Fig. 36-1



出土遺物(4)

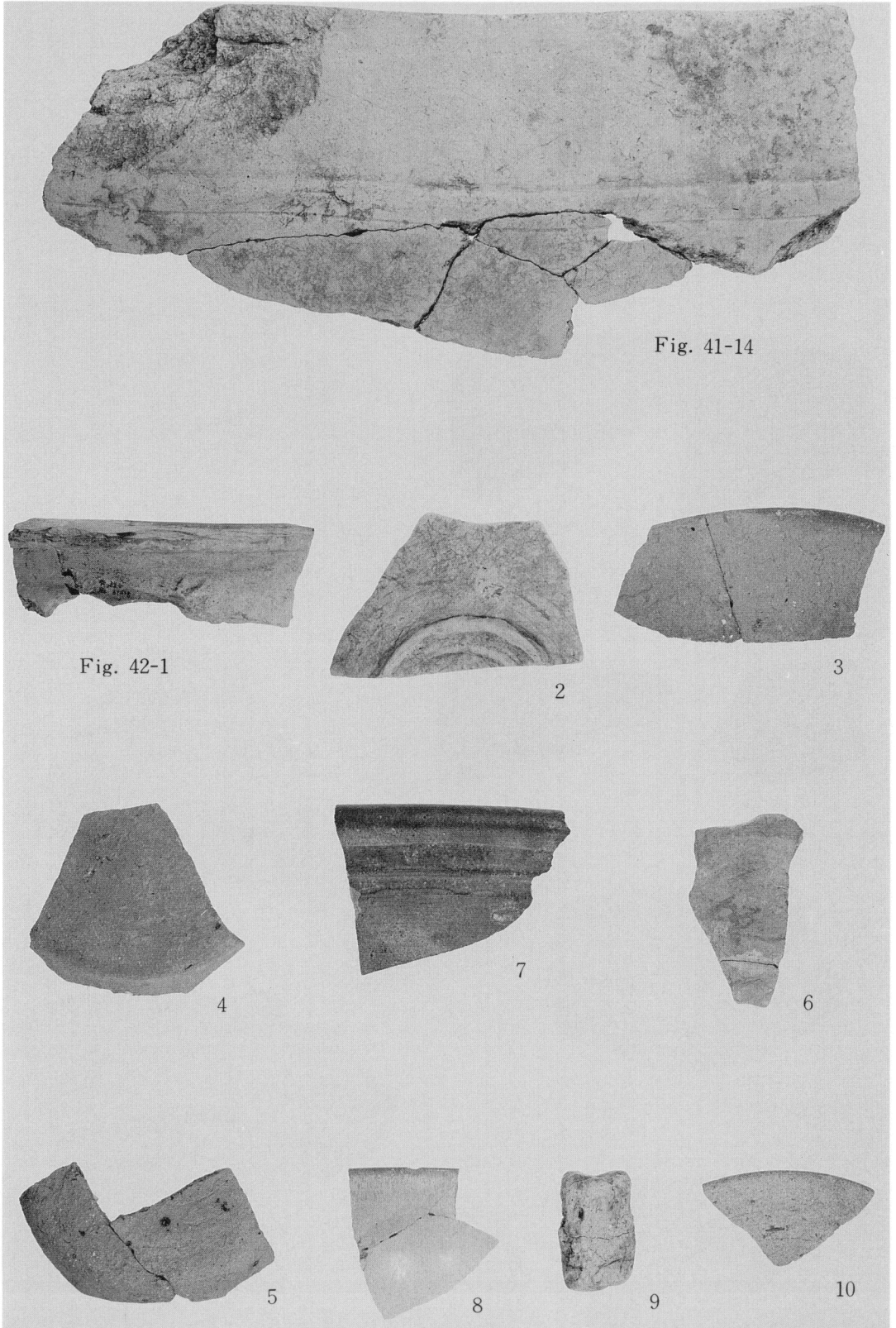
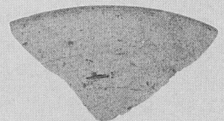
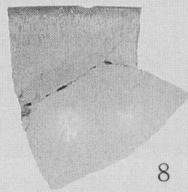
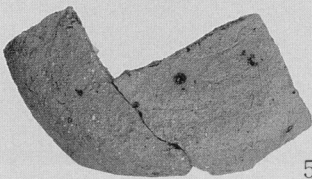
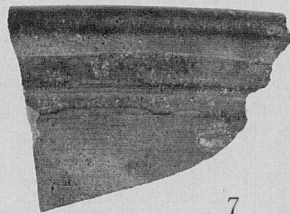
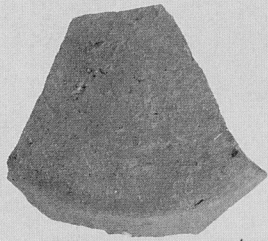
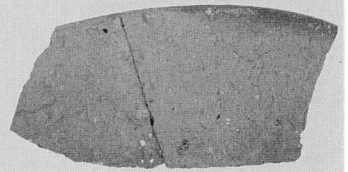
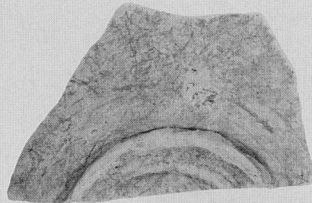
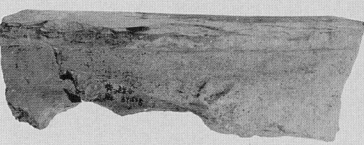
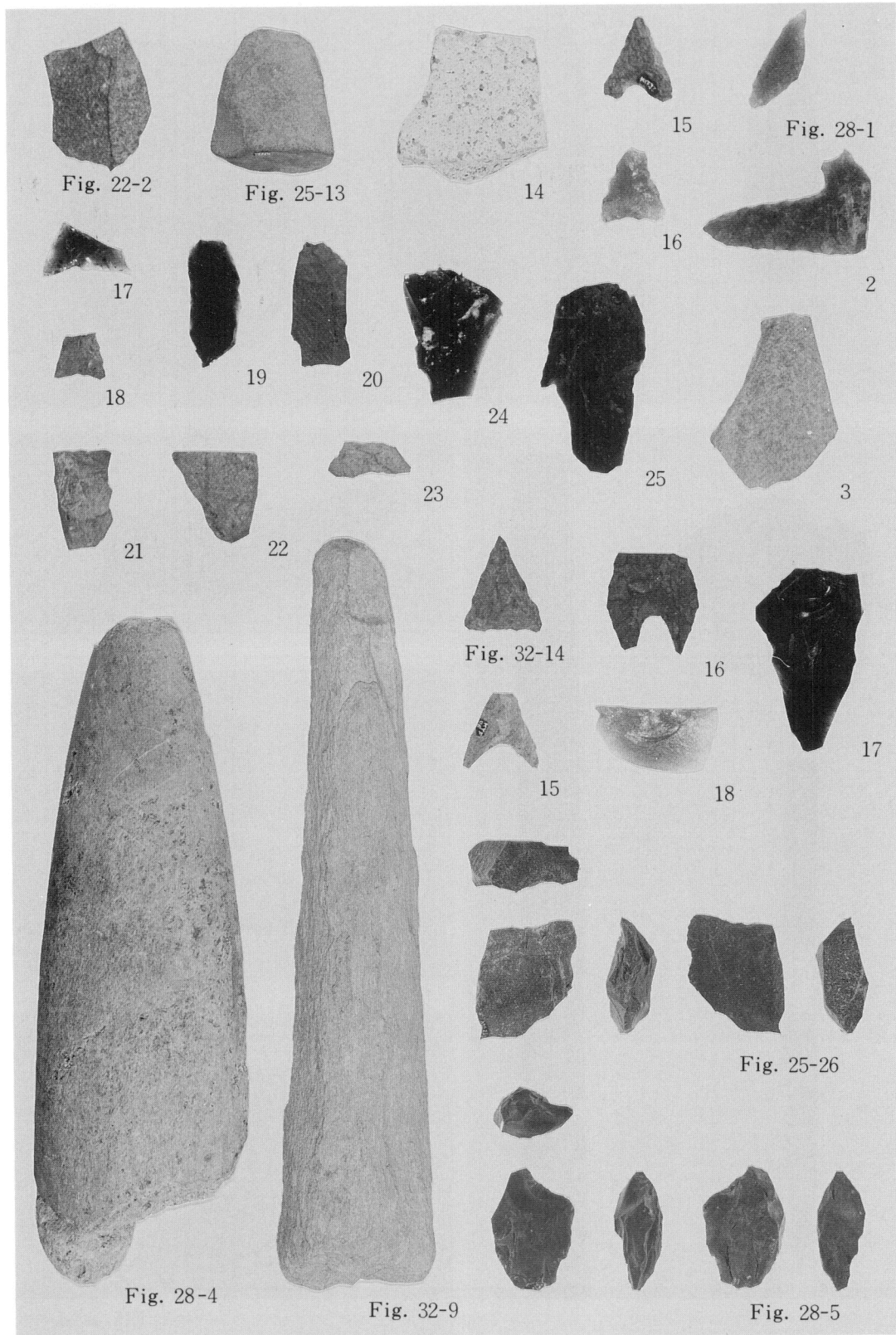


Fig. 41-14

Fig. 42-1



出土遺物(5)



吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査(19)

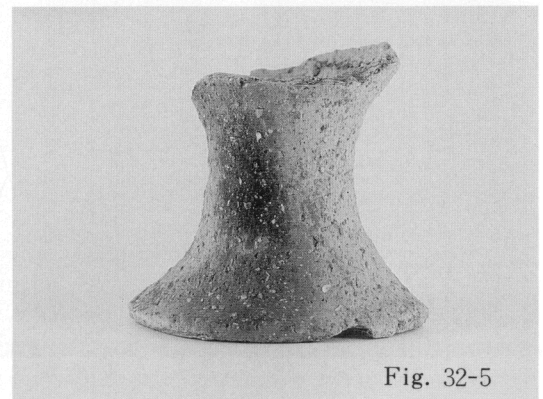
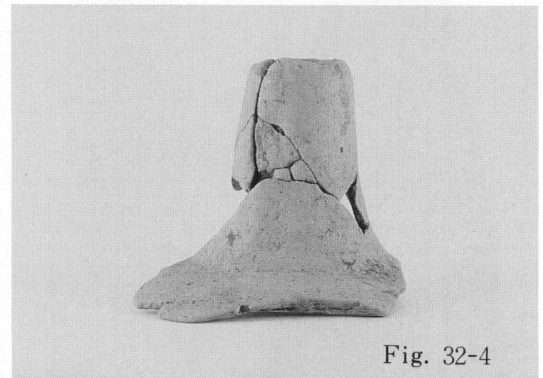
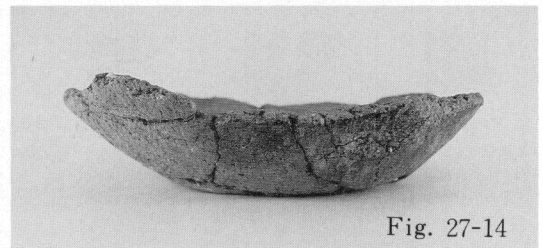
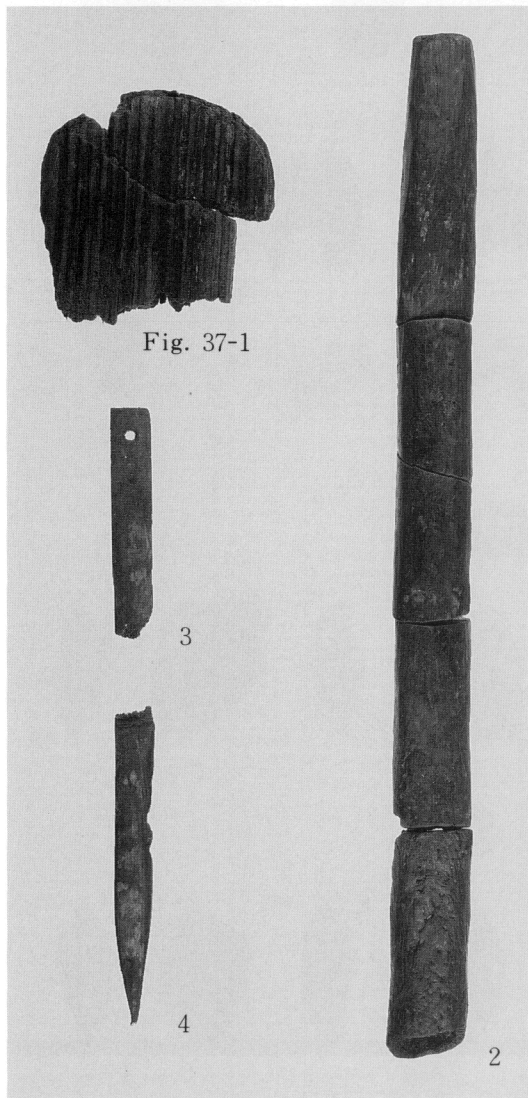
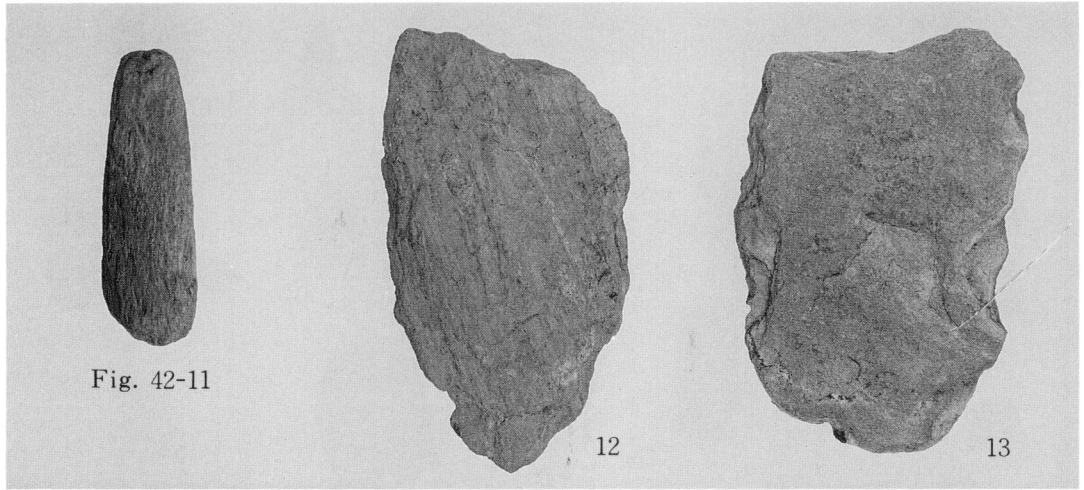




Fig. 36-5

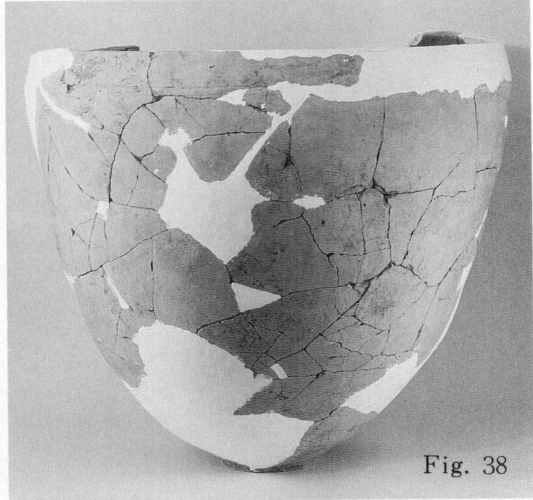


Fig. 38

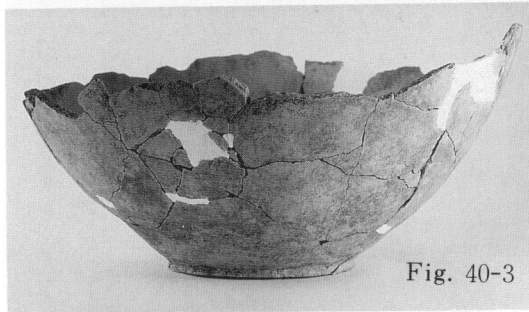


Fig. 40-3

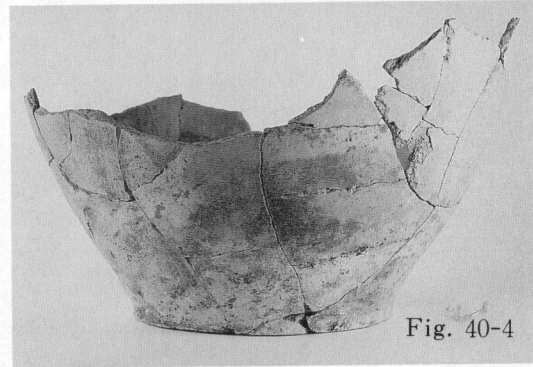


Fig. 40-4



Fig. 41-9

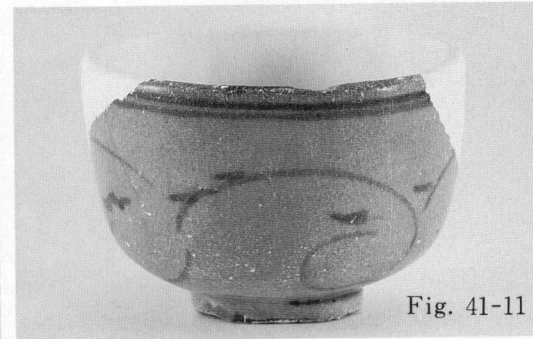


Fig. 41-11



Fig. 41-2

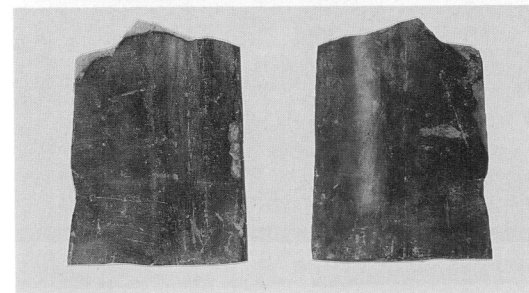


Fig. 41-8